

平成 22 年度（第 54 回）
岩手県教育研究発表会資料

特別支援教育

特別支援学校における 領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究

領域・教科を合わせた指導の実態調査に基づく授業づくりのための資料作成を通して

平成 23 年 2 月 18 日
岩手県立総合教育センター
長期研修生
所属校 岩手県立前沢明峰支援学校
田 村 典 子

《目 次》

研究の目的	1
研究の方向性	1
研究の内容と方法	1
1 内容と方法	1
2 研究の対象	1
研究結果の分析と考察	2
1 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本構想	2
(1) 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本的な考え方	2
(2) 領域・教科を合わせた指導を充実するための視点を取り入れた資料の作成の意義	5
(3) 調査の必要性	5
(4) 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本構想図	6
2 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究に関する調査の分析と考察	7
(1) 調査の目的	7
(2) 調査対象と回収率	7
(3) 調査の設問	7
(4) 質問紙の構成	7
(5) 調査の結果のまとめ	8
(6) 調査のまとめ	15
3 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料の作成	17
(1) 資料の概要	17
(2) 領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料「理解編」について	17
(3) 領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料「授業実践編」について	19
4 指導実践及び実践結果の分析と考察	22
(1) 指導実践の目的	22
(2) 指導実践の概要	22
(3) 指導実践の分析と考察	22
5 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関するまとめ	27
(1) 成果	27
(2) 課題	27
研究のまとめ	28
1 研究の成果	28
2 今後の課題	28

おわりに

【引用文献】

【参考文献】

研究の目的

県内の特別支援学校においては、知的障がいのある児童生徒が在籍し、自立をめざして学んでいる。これらの児童生徒においては、教師が見通しのもてる支援や経験のある活動を取り入れることなどで、一人一人が主体的に自分の力を発揮することができるようになる。そのため、県内の特別支援学校では、領域や教科に分けずに領域・教科を合わせた指導として教育課程を編成している。この領域・教科を合わせた指導は、児童生徒が学校生活に興味・関心をもって取り組み、達成感を感じることができる学習により、主体的に生活できる状況をつくる必要がある。このような学習を卒業後の生活を見通した目標に向けて小学部から高等部まで積み重ねていくことが重要である。

しかし、児童生徒の実態が多様で集団で学習していくことが難しかったり、児童生徒の指導内容や目標を考える場合どこに焦点を当てるかチームを組む教師間での共通理解が難しかったりする状況がある。また、学部間での連携がとりにくく、学校卒業後を見通した児童生徒の目標につなげることが難しいという状況などもある。これは、領域・教科を合わせた指導は、その指導計画、内容、方法等が担当教師に任されており、教師は文献や自分の経験をもとにしながら、様々な考え方を取り入れ授業づくりを行ってはいるものの実践上の課題を十分に整理できていないためと考える。

このような状況を改善していくためには、県内の特別支援学校での領域・教科を合わせた指導の授業づくりについて、教師がどのようなところに課題を感じているのかを調査により明らかにし、それを改善するための資料の作成、提示が必要である。

そこで本研究は、領域・教科を合わせた指導において、課題改善を図り、児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮する授業づくりができるような資料を作成して、領域・教科を合わせた指導の充実に役立てるものである。

研究の方向性

県内の特別支援学校の教諭に対して領域・教科を合わせた指導についての調査を行い、課題を明らかにし、それに基づいた授業づくりのための資料を作成する。授業づくりのための資料を活用した実践を基に、その結果の分析と考察を通して、県内の特別支援学校の領域・教科を合わせた指導の充実に役立てる。

研究の内容と方法

1 内容と方法

- (1) 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本構想の立案（文献法）
- (2) 手立てにかかわる実態調査及び調査結果の分析と考察（質問紙法）
- (3) 領域・教科を合わせた指導に関する資料の作成と指導実践
- (4) 領域・教科を合わせた指導実践に関する分析と考察
- (5) 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究のまとめ

2 研究の対象

- (1) 調査対象
岩手県内県立特別支援学校の教諭
- (2) 指導実践の対象
岩手県立前沢明峰支援学校 小学部6年生担当者

研究結果の分析と考察

1 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本構想

(1) 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本的な考え方

ア 知的障がい教育と領域・教科を合わせた指導

知的障がい者とは、特別支援学校学習指導要領解説総則等編（幼稚部・小学部・中学部）の中で「一般的に認知や言語などにかかわる知的能力や、他人との意思の交換、日常生活や社会生活、安全、仕事、余暇利用などについての適応能力が同年齢の児童生徒に求められるまでに至っておらず、特別な支援や配慮が必要な状態とされている。また、その状態は、環境的・社会的条件で変わりうる可能性があるといわれている。」と記されている。また、「知的障がいのある児童生徒の学習上の特性としては、学習によって得た知識や技能が断片的になりやすく、実際の生活の場で応用されにくいことや、成功経験が少ないことなどにより、主体的に活動に取り組む意欲が十分に育っていないことなどが挙げられる。」としている。

これらのことから、知的障がいのある児童生徒には、知的障がいの実態と学習上の特性を踏まえた学習を行う必要がある。

【資料1】は、知的障がいのある児童生徒にとって重要な基本的対応であるとして特別支援学校学習指導要領(幼稚部・小学部・高等部)解説(2009)に記されているものである。児童生徒一人一人の実態に即しながら、日常生活の充実や自立した社会生活を目指し、実際的な経験を重視し、意欲が育つよう学習していく必要があることが分かる。

領域・教科を合わせた指導は、知的障がいのある児童生徒に対して【資料1】に掲げられているような教育的対応を踏まえた指導の形態として、必要に応じて取り入れることができるとされている。

【資料1】知的障がいのある児童生徒の学習上の特性から重要とされる教育的対応

児童生徒の実態に即した指導内容を選択する。

児童生徒が自ら見通しをもって行動できるよう、日課や学習環境などを分かりやすくし、規則的でまとまりのある学校生活が送れるようにする。

望ましい社会生活を目指し、日常生活や社会生活に必要な技能や習慣が身に付くように指導する。

職業教育を重視し、将来の職業生活に必要な基礎的な知識や技能及び態度が育つよう指導する。

生活に結びついた具体的な活動を学習活動の中心に据え、実際的な状況下で指導する。

生活の課題に沿った多様な生活経験を通して、日々の生活の質が高まるよう指導する。

児童生徒の興味・関心や得意な面を考慮し、教材・教具等を工夫するとともに目的が達成しやすいように、段階的な指導を行うなどして、児童生徒の学習活動へ意欲が育つよう指導する。

できる限り児童生徒の成功経験を豊富にするとともに、自発的・自主的な活動を大切に、主体的活動を促すよう指導する。

児童生徒一人一人が集団において役割が得られるよう工夫し、その活動を追考できるよう指導する。

児童生徒一人一人の発達の不均衡な面や情緒の不安定さなどの課題に応じて指導を徹底する。

イ 領域・教科を合わせた指導の考え方

(ア) 授業の指導形態としての領域・教科を合わせた指導

特別支援学校では、領域・教科を合わせた指導を必要に応じ教育課程に取り入れ、知的障がいの実態と学習上の特性を踏まえた学習に努めている。これは、学校教育法施行規則第130条第2項を根拠に、知的障がいのある児童生徒に対して、実際的な経験を通して生活に必要な知識・技能を学習することをねらっているためである。

そこで、特別支援学校では、日常生活の指導、遊びの指導、生活単元学習、作業学習を代

表的なものとして実践している。これらについて特別支援学校学習指導要領(幼稚園・小学部・高等部)解説(2009)では、【資料2】のように説明している。

【資料2】領域・教科を合わせた指導の説明

日常生活の指導

日常生活の指導は、児童生徒の日常生活が充実し、高まるように日常生活の諸活動を適切に指導するものである。

遊びの指導

遊びの指導は、遊びを学習活動の中心に据えて取り組み、身体活動を活発にし、仲間とのかかわりを促し、意欲的な活動をはぐくみ、心身の発達を促していくものである。

生活単元学習

生活単元学習は、児童生徒が生活上の目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習するものである。

作業学習

作業学習は、作業活動を学習活動の中心にしながら、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである。

以上のように、領域・教科を合わせた指導は、学習活動に取り組むことで日常生活の充実や自立した社会生活の充実を目指すものとされており、教師がそのことを十分に理解して授業を行う必要がある。

(1) 自立的・主体的生活につなげる領域・教科を合わせた指導

千葉大学教育学部附属養護学校(2002)は、「教師のすべきこととしては、領域・教科を合わせた指導を大きく位置付けた生活で、どの

【資料3】自立的・主体的生活について

確かな目当て・見通しをもち、仲間とテーマを共有できる生活
一人ひとりが、自分の力で活動し、仲間とともに取り組める生活
存分に活動し、大きな満足感・成就感をわかちあえる生活

子にも自立的・主体的生活を実現し、その充実・発展を図ることが最優先となる」とし、自立的・主体的生活について、【資料3】のように示している。

集団の中で共に活動を行う共同の生活を中心に据え、目当てや見通しの設定を個々の実態に応じて行うこと、自分の力で活動できるように個々の力に応じた支援を整えていくこと、存分な活動ができるように個々に配慮していくことなど、一人一人に焦点を当てることを重視している。

ウ 領域・教科を合わせた指導の良さ

領域・教科を合わせた指導は、日常生活の充実や自立した社会生活の充実を目指している。そこで、学習によって得た知識や技能を実際の生活の場で応用し、主体的に取り組む意欲を高めることができるよう、日常生活を充実させることにつながる指導をしたり、生活の中の課題を解決したり、遊んだり、作業したりするような、実際に経験することを通して自立につながる学習を行っていくものである。このような、経験重視の学習をするためには、以下のような取組が大切であると考えられる。

(ア) 興味・関心に応じるような取組

日常生活や生活上の課題から指導内容を設定できるので、児童生徒の興味・関心に応じるような取組とすることができる。そこで、教師が、興味・関心に応じた取組をすることで、活動の目的や活動内容が分かりやすくなり、また、活動を繰り返すことができる日課や、活動の流れや日程計画について規則的で分かりやすくすることで、見通しをもった取組にすることにつながる。このように児童生徒の興味・関心に基づいた学校生活にすることで、児童生徒の自発的・自主的な活動を促し、意欲的な活動とすることができる。

(イ) 個に応じた指導内容の設定をした取組

児童生徒一人一人の発達の違いや、それぞれの生活に必要な知識や技能による課題に応じることができると、個に応じた指導内容の設定をすることができる。このように、児童生徒一人一人の生活の充実を目指し、一人一人の課題に応じた学習をすることにより、個々の日常生活や社会生活に必要な知識、技能の習得や望ましい態度を育てることができる。

(ウ) 活動量を確保できる取組

一連の活動を通して取り組むことで、児童生徒自身が、活動を行う目的が分かりやすくなり、十分に活動できる取組とすることができる。そこで、個々の実態に合った目的がもてるような活動や、自分で課題を解決できるような手立てにより、自分の力を十分に発揮した取組につながり、児童生徒は、満足感・成就感を味わうことができる。

(I) 児童生徒が向上心をもてるような取組

実際の活動を通して行うことで、生活に応用できる活動を成功経験を重ね学習することができるため、向上心をもてるような取組にすることができる。そのため児童生徒が一人で、できるように教材・教具を工夫するなど環境を整えると共に、目的が達成できるような段階的な指導を行うように計画を立てることで、児童生徒が向上心をもてるような取組とすることができる。

(オ) 児童生徒の良さを生かした役割分担をした取組

課題を共有しながら集団の中で一緒に取り組むことができるため、その中で一人一人に合った、役割が得られるように工夫することを通して、自分がやるべき活動を意識し、取り組むことにつながる。このように、児童生徒の良さを生かした役割分担ができるグループ分けや、教師の役割分担を考えた取組により、集団の中での役割を担う共同の生活につなげることができる。

以上の(ア)～(オ)に示したことから、領域・教科を合わせた指導の良さについて以下のようにまとめる。

- ・興味・関心に応じるような取組により、意欲的な活動につなげることができる。
- ・個に応じた指導内容の設定をした取組により、日常生活や社会生活に必要な知識・技能及び態度を育てることができる。
- ・活動量を確保した取組により、満足感・成就感を味わうことにつなげることができる。
- ・児童生徒が向上心をもてるような取組により、自分の力で活動することにつなげることができる。
- ・児童生徒の良さを生かした役割分担をした取組により、社会生活に向け集団の一員としての意識を育てることにつなげることができる。

エ 領域・教科を合わせた指導の指導内容

領域・教科を合わせた指導は、特別支援学校学習指導要領総則(2009)では、「各教科、道徳、特別活動及び自立活動の全部又は一部を合わせて指導を行う場合には、(中略)児童又は生徒の知的障がいの状態や経験等に応じて、具体的に指導内容を設定する」としている。

このように、領域・教科を合わせた指導は、児童生徒の実態に応じて、具体的に指導内容を設定し、日常生活や社会生活の充実につなげる必要がある。そのため、教師は、児童生徒の現在の実態と将来目指す自立した生活を見据えた目標を設定する必要がある。それゆえ授業は、目の前の目標を達成しつつ、それが日常生活の充実や自立した社会生活の充実という目標につながるものでなければならない。

授業は、取組の方法等において、自由度が高い反面、チームで授業を行う際は、共通理解ができ難い。そこで、教師の取組方法等においての課題を整理し、日常生活の充実や自立した社会生活の充実という目標につなげるため、領域・教科を合わせた指導の充実のための視点を共通に理解する必要がある。

オ 領域・教科を合わせた指導の充実のための視点

これまで述べた児童生徒の学習上の特性から重要とされる教育的対応と領域・教科を合わせた指導の良さ,そして,教師が領域・教科を合わせた指導を行う場合の課題を加味し,本研究では,領域・教科を合わせた指導の充実のための視点として,「主体性」「学習ニーズ」「達成感」「自立性」「共同性」の五つを考えた。以下,その視点について説明する。

(ア) 主体性

日課や学習の環境などを分かりやすくし,見通をもって学習することで,児童生徒が生活に必要な経験を自ら意欲をもち取り組むことができるよう,「主体性」という視点をもち指導に当たる。

(イ) 学習ニーズ

知的障がいの状態や経験に応じて,児童生徒の今もっている力や良さ,自立につなげるために何が必要であるかなどを把握することで,児童生徒が日常生活や社会生活に必要な技能や習慣を学習を通して身に付けることができるよう,「学習ニーズ」という視点をもち指導に当たる。

(ウ) 達成感

個に応じた活動量の設定や環境の工夫をすることで,児童生徒が目的をもち,十分な活動をしなが大きな満足感,成就感を得ることができるよう,「達成感」という視点をもち指導に当たる。

(エ) 自立性

できるだけ自分の力で活動できる環境に整えることで,児童生徒が成功経験を積み重ね,自信をもつことにつながるよう,「自立性」という視点をもち指導に当たる。

(オ) 共同性

望ましい社会生活にむけた集団での学習を通して,一人一人に合った役割が得られるよう工夫することで,児童生徒が集団の一員としての意識をもてるよう,「共同性」という視点をもち指導に当たる。

(2) 領域・教科を合わせた指導を充実するための視点を取り入れた資料の作成の意義

領域・教科を合わせた指導の充実のための視点に基づいて授業を行うことで,領域・教科を合わせた指導の良さを生かした授業を行うことができる。そこで,領域・教科を合わせた指導を行う場合には,領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について理解して,授業を取り入れることが必要である。そのためには,領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について分かりやすく提示する資料を作成することが必要である。

(3) 調査の必要性

ア 岩手県内の県立特別支援学校の教育課程にみる領域・教科を合わせた指導

岩手県内の各県立特別支援学校の平成 22 年度学校要覧に記載されている教育課程を基に,領域・教科を合わせた指導の状況をみると,教育課程に占める割合については,20%に満たない学級から 95%以上を占める学級までであった。

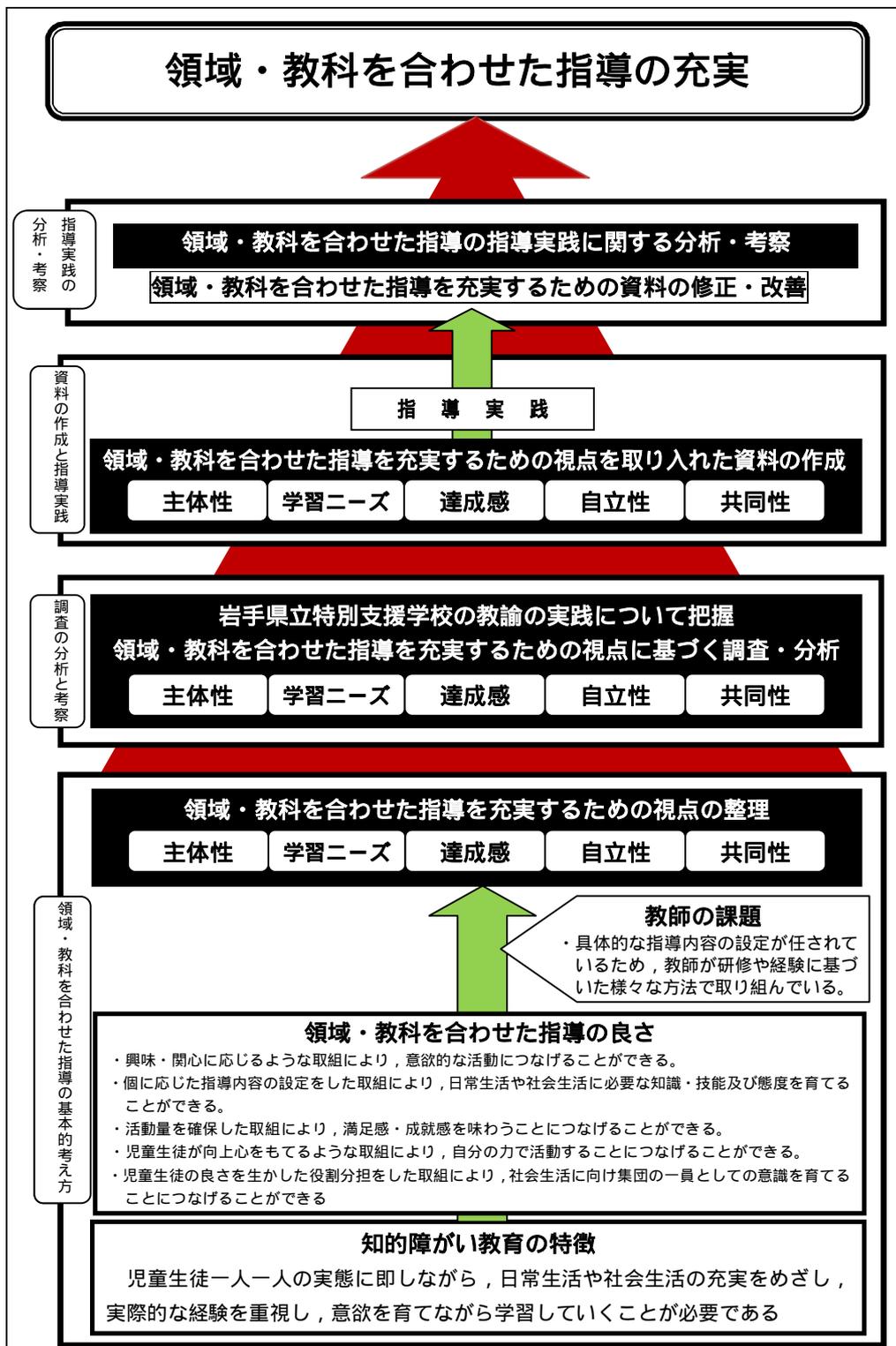
岩手県内の県立特別支援学校では,児童生徒の実態等により,領域・教科を合わせた指導の教育課程への位置付けは様々であり,取組の様子も様々であると考え。そこで,本研究で考える五つの視点を基にした調査を行い,領域・教科を合わせた指導を実践している教師が,どのように取り組んでいるのか知ることが必要である。

イ 調査の意義

岩手県内の県立特別支援学校の教諭を対象とし、領域・教科を合わせた指導の取組の様子を調査し、また、前述した本研究で提示した大切な五つの視点について授業に生かしていくための課題を整理することにより、資料づくりの方向性を明らかにする。

(4) 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本構想図

特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本的な考え方を踏まえ、基本構想図を【図1】に示した。



【図1】 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本構想図

2 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する研究に関する調査の分析と考察

(1) 調査の目的

県内の特別支援学校における領域・教科を合わせた指導について、教諭を対象とした調査を実施することによって、本県における領域・教科を合わせた指導の取組について把握し、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料作成に資する。

(2) 調査対象と回収率

岩手県立特別支援学校の管理運営に関する規則第3条に規定する教諭
配付人数 651 名中 584 名回答（回収率 89.7%）

(3) 調査の設問

調査の設問を【表1】に示す。

【表1】調査の設問

問番号	設問
問1	あなたは、現任校で、領域・教科を合わせた指導を行ったことがありますか？
問2	領域・教科を合わせた指導についてお聞きします。 (1) 領域・教科を合わせた指導を行うとき、以下のア～オについて児童生徒が取り組む姿として大切にしている順番に記号を記してください。 ア 進んで活動に取り組む姿 イ 実態に応じた活動に取り組む姿 ウ 存分に取り組む姿 エ 自分のもてる力を高めようと取り組む姿 オ 仲間や教師とともに活動に取り組もうとする姿 (2) 領域・教科を合わせた指導を行うとき以下のア～オのことについてどの程度取り入れていますか。 ア 児童生徒の興味・関心に応じるような取組 イ 個に応じた指導内容 ウ 活動量の確保 エ 児童生徒が向上心をもてるような手立て オ 児童生徒の良さを生かした役割分担 (3) あなたが行っている領域・教科を合わせた指導の取組について振り返ってください。
問3	領域・教科を合わせた指導についてのご意見をご自由にお書き下さい。

(4) 質問紙の構成

ア 目指す児童生徒の姿基本構想で示した本研究で考える領域・教科を合わせた指導の授業づくりを行うに当たっての大切な五つの視点を基に、それぞれの視点から目指す児童生徒の姿と、それに迫るために中心となる取組を【表2】に示すように考えた。

イ 各設問の関わり

調査の分析に当たっては、目指す児童生徒の姿についての優先順位、授業に取り入れている取組、その取組の具体的内容についての回答を関連させながら分析をすることができるように設問を構成した。

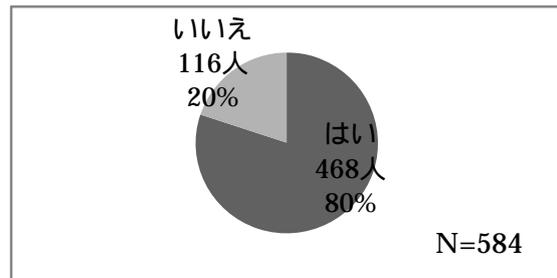
【表2】視点と目指す児童生徒の姿及び、それに迫るために中心となる取組

視点	目指す児童生徒の姿とそれに迫るために中心となる取組
主体性	「進んで活動に取り組む姿」 生活に必要な経験を、見通しや目的をもって具体的に学ぶことにより、自らが積極的に学習に意欲をもって取り組むことができる。そのためには、児童生徒の興味・関心に応じるような取組を中心にしながら指導に当たる。
学習プロセス	「能力に即した活動に取り組む姿」 自分の日常生活や社会生活に合わせた活動を通して、生活が充実するような技能や習慣を身に付けることができる。そのためには、個に応じた指導内容の設定をした取組を中心にしながら指導に当たる。
達成感	「存分に活動に取り組む姿」 活動に対する目的をもち、十分に力一杯活動に取り組むことで、大きな満足感、成就感をもつことができる。そのためには、活動量を確保できる取組を中心にしながら指導に当たる。
自立性	「自分のもてる力を高めようと取り組む姿」 自分の取組が評価される経験を通して自信がつき、さらにできるだけ自分の力で活動しようと意欲が生まれ、向上心をもつことができる。そのためには、児童生徒が向上心をもてるような取組を中心に指導に当たる。
共同性	「仲間や教師とともに取り組む姿」 集団の中で皆と共に力一杯取り組むことで、集団の一員としての意識を培うことができる。そのためには、児童生徒の良さを生かした役割分担を中心に指導に当たる。

(5) 調査の結果のまとめ

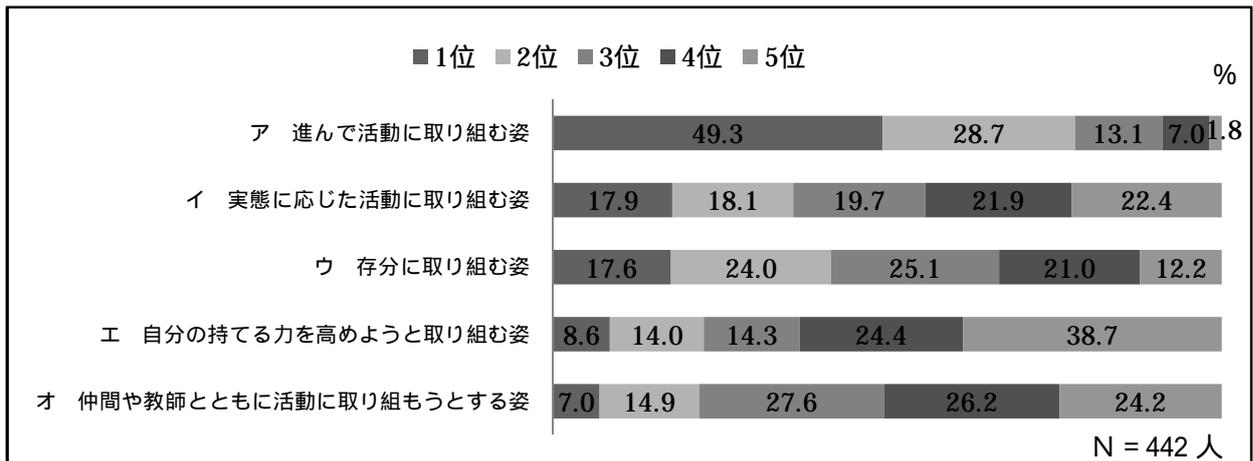
ア 質問項目1 『あなたは、現任校で、領域・教科を合わせた指導を行ったことがありますか』

本調査では、まず現任校において領域・教科を合わせた指導を行ったことがある教諭について、また指導を行っていない教諭について人数を把握した。指導を行ったことがある教諭については、質問紙の次に続く質問に答えてもらい、行ったことのない教諭には自由記述に記入をしてもらった。



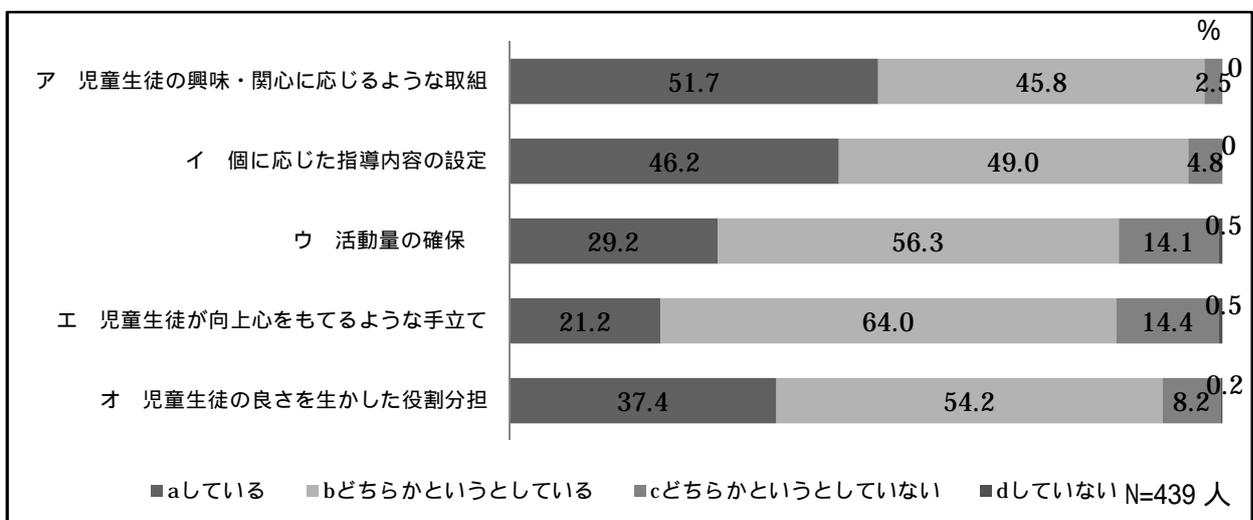
【図2】現任校で領域・教科を合わせた指導を行っている教諭の人数

イ 質問項目2(1) 『領域・教科を合わせた指導を行うとき、以下のア～オについて児童生徒が取り組む姿として大切にしている順番に記号を記してください。』



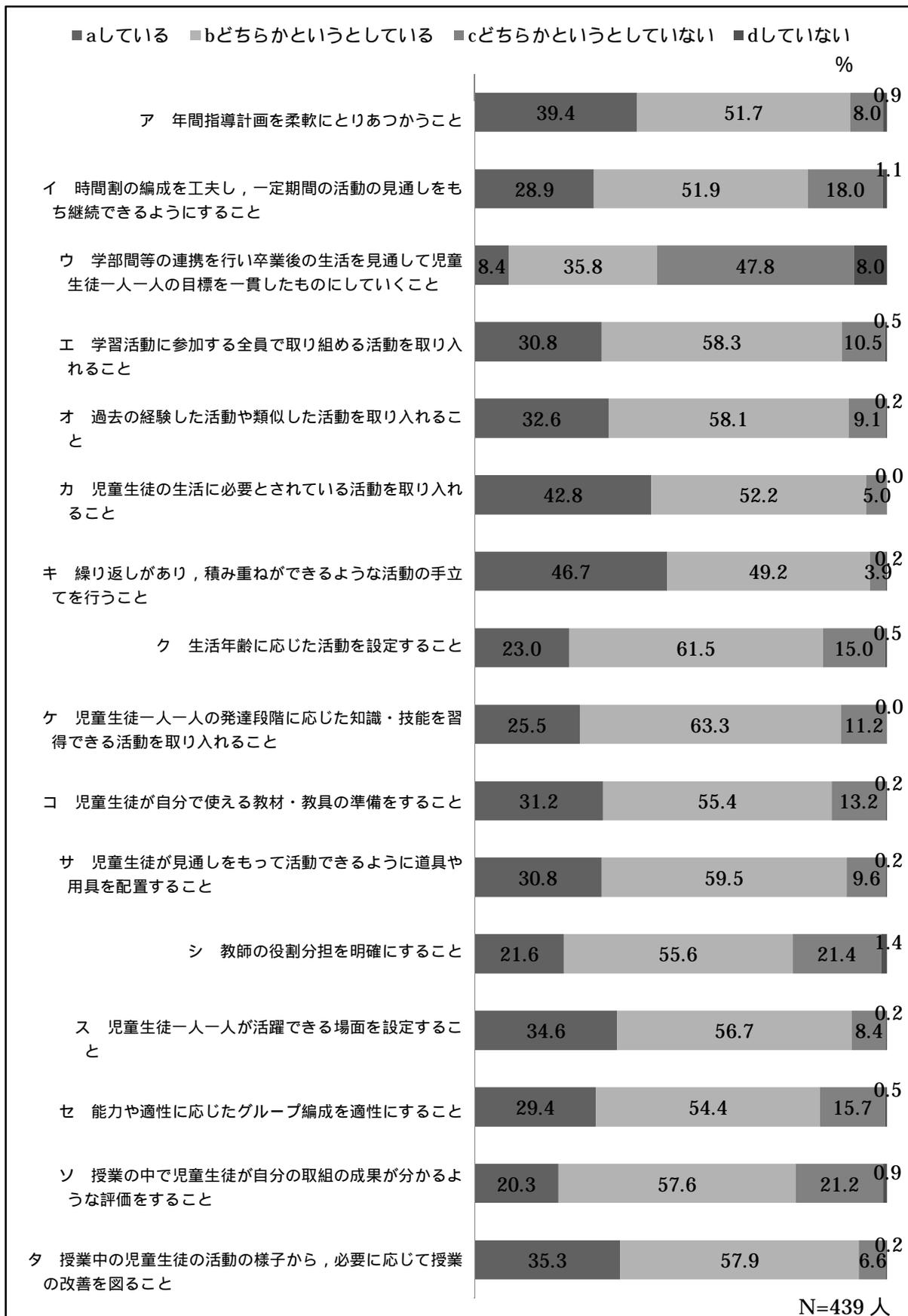
【図3】指導を行うに当たって大切にしている五つの視点からの児童生徒の姿の重視している順位

ウ 質問項目2(2) 『領域・教科を合わせた指導を行うとき以下のア～オのことについてどの程度取り入れていますか』



【図4】領域・教科を合わせた指導の授業を行うときに取り入れている児童生徒の取組の様子

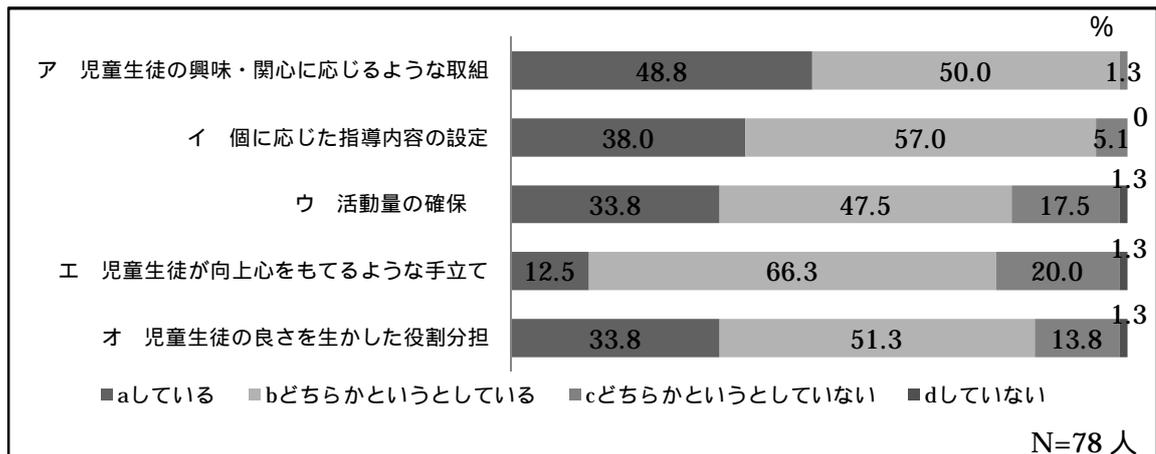
エ 質問項目 2 (3) 『あなたが行っている領域・教科を合わせた指導の取組について振り返ってください。』



【図5】領域・教科を合わせた指導の取組の具体的な内容について、実践の振り返り

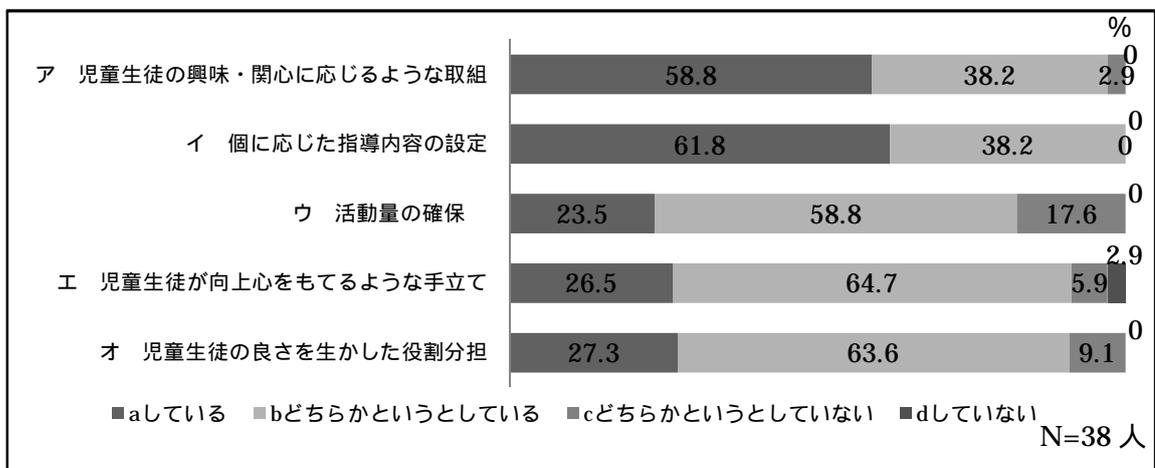
オ 目指す児童生徒の姿における授業に取り入れている取組や具体的内容との関連

(ア) 存分に活動する姿を1位に選んだ教諭と、それに迫るために中心となる取組との関連



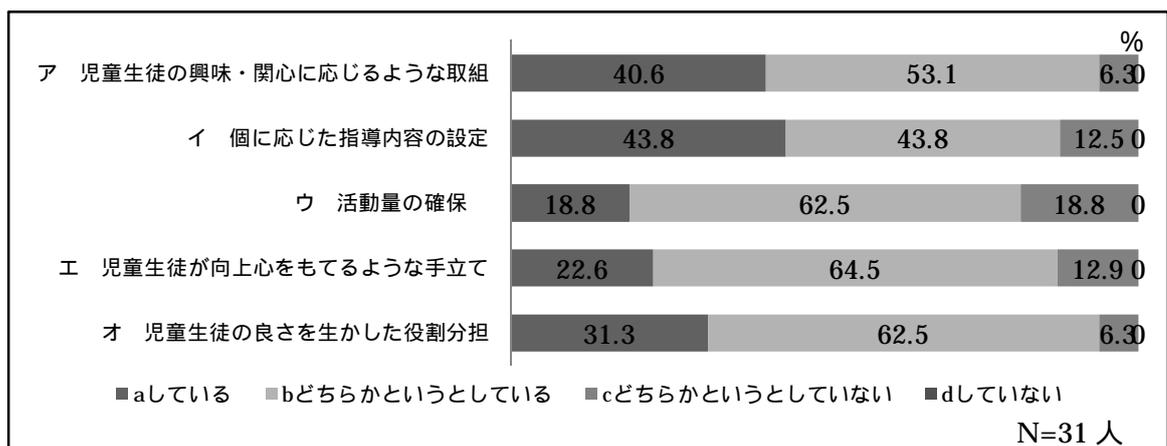
【図6】存分に活動する姿を1位に選んだ教諭と、それに迫るために中心となる取組との関連

(イ) 自分のもてる力を高めようとして取り組む姿を1位に選んだ教諭と、それに迫るための中心となる取組



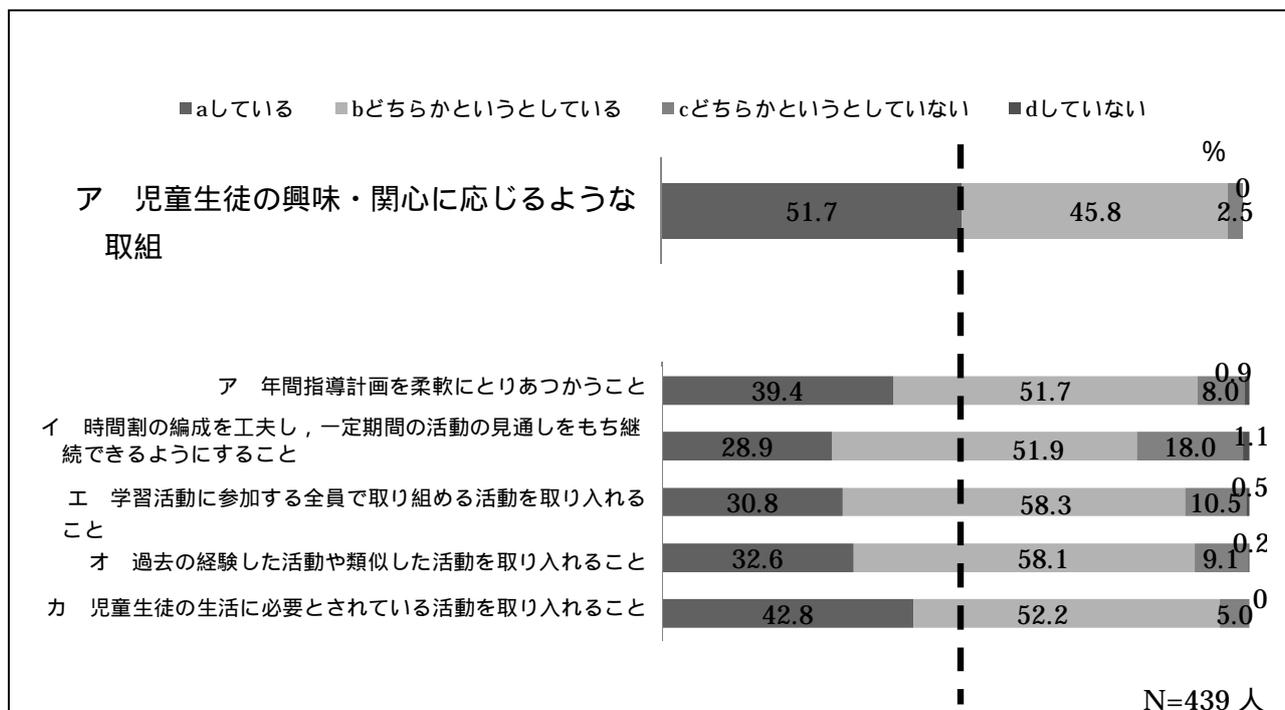
【図7】自分のもてる力を高めようとして取り組む姿を1位に選んだ教諭と、それに迫るために中心となる取組との関連

(ウ) 仲間や教師とともに活動に取り組む姿を1位に選んだ教諭と、それに迫るための中心となる取組



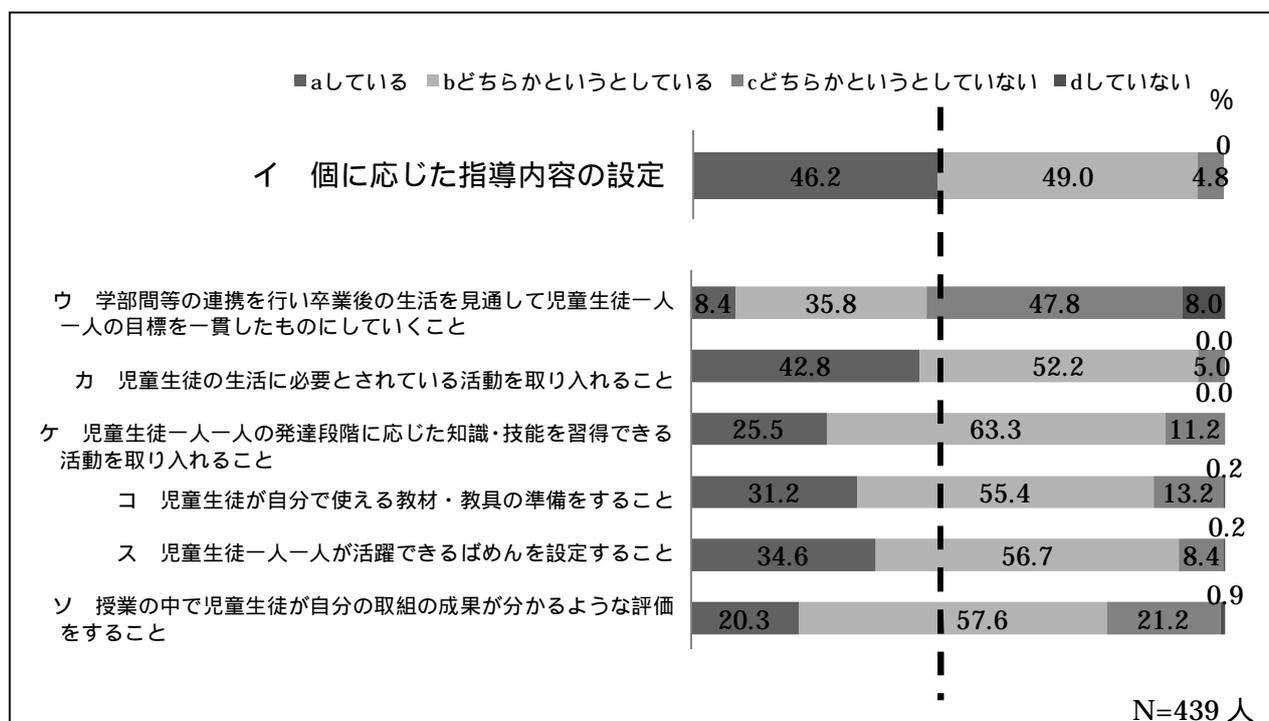
【図8】仲間や教師とともに活動に取り組む姿を1位に選んだ教諭と、それに迫るために中心となる取組との関連

(I) 児童生徒の興味・関心に応じるような取組と，具体的項目との関連



【図9】児童生徒の興味・関心に応じるような取組と，具体的項目との関連

(オ) 個に応じた指導内容の設定と，具体的項目との関連



【図10】個に応じた指導内容の設定と，具体的項目との関連

カ 質問項目3 自由記述

自由記述については，領域・教科を合わせた指導を行っている教諭，現任校では行っていない教諭を合わせて，全体の19%の教諭が記入した。記入された内容を次ページ【資料4】に示す。

【資料4】自由記述（下線は、複数の教諭が共通的に感じている項目で資料の作成等に参考にした記述）N = 124人

指導の一貫性や目的など

- ・将来の姿（そうあって欲しい姿）を思い描いて小，中，高と連携のとれた指導を進めなくてはならないと思う。
- ・系統立てた指導が難しい。前の学部，前の学年が何をやってきたのかわからないことがある。年計を作る際，学校全体としての方向性やビジョンが必要ではないかと常々感じている。
- ・学校としての一貫した教育が必要。目安になる指導内容や目標の設定が大切だと思う。
- ・領域・教科を合わせた指導の方法や内容は，担当教員の考え方によるところが大きく，系統性に欠けるところがあると思われる。
- ・どんな内容を取り上げるか悩みます。これまでの学年でやってきたことを生かしてステップアップした内容も取り上げたいと思うが，内容が担任等に任せられていることもあり，うまく引き継いでいないと感じる。
- ・小学部の生活単元学習で物づくりの活動が増えちゃう。高等部では，作業の目指すところが曖昧になってしまう。
- ・学習活動がつながるような学部間の連携がうまく図れるとよい。
- ・学部間の連携は，なかなか難しいと思うが，日常生活の指導等，将来の生活に深く関わる内容なので卒業後の生活をイメージしながら一貫性をもって指導していくことは，本当に大切なことだと痛感している。
- ・将来，必要とされる力をいかに身に付けさせるか，課題は多いと感じている。
- ・「領域・教科を合わせた指導」というが，何と何の要素が含まれているのか，とか教育課程の中には明記（特設の時間がない）されていないまでも，知的障がいにおける自立活動の要素，生活単元学習についてきちんと共通理解もなされておらず，何となく雰囲気，あるいは教員の都合で実施されていることが多いように感じる。「目指す子ども像」やテストバッテリーetc・・・客観的な実態把握もなされないまま漫然と授業がこなされているように感じてならない。また，私の在籍校としては，分教室（小，中）の位置付けと今後の展望がどうなっていくのか自分も分からないし，大変不安である。
- ・担当している子どもを前にして，日々，悩みながら活動しているのが現実である。
- ・指導の目的をはっきりさせて，教諭同士で共通理解しないと，授業がブレやすいと思う。（授業にならず楽しみだけがピックアップされる）
- ・幅が広いので（指導内容）目標の内容の焦点がぶれやすい。
- ・目的がぼやけがちになる。
- ・「領域・教科を合わせた指導」ではなく「領域・教科に分けない指導」の方が，人間全体としての教育に適していると常々考えている。この二つの指導方法は，視点が全く別です。
- ・何のために全科・統合するのかきちんと押さえる必要がある。その内容と教科学習の内容をきちんとリンクさせること。作業一辺倒ではダメ。楽しい授業にだまされない。目的は「何を身に付けさせるか」「何を向上させるか」が大切。興味，集中，楽しさなどはあくまでも配慮事項。肉が栄養として必要なときに味付けをどうするか，何が好きかは，実態に合わせる。しかし，肉を与えることがメイン。楽しい授業はあくまでも味付けでしかない。「生単」は，生活と関連づけて，「作業」は，キャリア教育と関連付けて，そして，不足部分，高めたい部分を教科とリンクさせて，トータルとしてカリキュラムを組み立てることが大切。
- ・合わせた指導と教科指導との関連が，不明確な部分があり，教師間での確認が必要であると思う。（例えば高学年では，教科として図工，音楽，体育があり，これらと合わせた指導の関連，低学年での遊びが高学年の音楽や体育の時間割のコマだけ移行するが，そもそもこれらは移行できる性質のものか勉強不足で分からない）
- ・どの教科のどの部分かを明確にしないと目標がぼやけることがある。
- ・教科的な内容を系統的にどだけ盛り込められるか，教師の力量にかかっている。
- ・領域・教科を合わせた指導は，支援学校の要である。基本に教科があり，生活年齢に合わせ，その興味と意欲のある題材で味付けするので大変重要で基本となるものであると思われる。そのため，体育だったり，音楽だったり，身に付けたい教科をしっかりと計画的に行うことが必要である。醍醐味があり，ダイナミックなことができる指導法である。
- ・領域・教科を合わせた指導の中で全領域，教科の指導をするのは難しい。見通しをもちにくいと思いながら実践している。
- ・日生，生単の中で教科を取り入れて学年対応の学習内容を設定できるもの，できないものがある。どこまでねらうか判断が難しい。
- ・むやみに領域・教科を合わせた指導に組み込んでいいのかと疑問を感じることもある。
- ・領域・教科を合わせた指導の中で教科（国語あるいは算数，数学等）を取り上げて指導することは，十分に時間をとれないと思う。従って，教科の時間も，教育課程の中には必要であるとする。
- ・進路とからめて，その子どもに付けたい力と教科の整合性をしっかり見極めて（各関係者と）支援にあたりたいと思う。
- ・各教科の学習を実生活や将来臨むべき姿に結びつける汎化の取組が，領域・教科を合わせた指導の根幹であるとする。
- ・「生活単元学習」なのか「総合」なのか区分けが曖昧であった。
- ・合わせた指導での学習がほとんどです。子ども達にとって教科のみでの学習では，成り立たないのが事実です。いろいろな要素を組み合わせる指導できる効果は大きいと感じている。
- ・本校にきて生活単元学習，遊びの指導のねらいと個別の指導計画の一人一人の目標の関係が分からなくなってきました。（スキルをねらいにしてもスキルが身に付くことそのものをねらいとしてはいけない・・・）生活中心教育において個別の移行支援計画，個別の指導計画って何だろう？と悩む。

児童生徒の実態把握の情報交換

- ・領域・教科を合わせた指導は，児童の実態に合わせて柔軟に対応できるが，その分教師の力量，児童生徒の実態を把握する力が問われる。それぞれの実践をもっと気軽に情報として得られればより充実した指導実践に生かすことができると思う。
- ・指導する職員が生徒一人一人の身に付けたい力を把握し，授業や生活場面をとらえて，日々の取組を積み重ねていくことが成長につながると思う。
- ・生活年齢に応じた生活年齢を意識した活動を展開させるには，主担当者と副担当者の連携と共通理解が必須。学部内で統一した姿勢を基に「言葉」「声かけ」に十分配慮していかないとクリアできない点だと思われる。
- ・領域・教科を合わせた指導では，児童生徒の生活の中で必要な力を見極め，どんな指導が必要かを検討しなければならない。教師の個人の力量にともすれば陥りやすいので常に職員間での話し合いが必要になると思う。（生活に必要な力）
- ・担当者だけでなく担任や分掌等で関係している先生方にも意見を聞き，共通理解して指導を行うことが大切だと感じている。
- ・忙しい中ではあるが，教師間の打ち合わせ，連携が大事であると感じている。
- ・“子どもの実態ありきで内容を設定できる”というのがよいところでもあり，難しいところでもあると感じる。（以前勤務していた学校で）
- ・担当する職員の考えでは，指導が偏ることがあると感じるときがある。合わせた指導の中に様々な内容をまんべんなく取り入れていくのはとても難しく，特別支援学校の教員の力量が問われることだと感じている。
- ・「領域・教科を合わせた指導」を行う場合は，子どもの実態調査，アセスメントを随時行う必要がある。実態調査をあまり行わず，何年も同じカリキュラムで行っている場合がみられる。
- ・小学部の低学年をずっと担当しているので，主として遊びを中心とした指導実践をもとに回答した。そのため，分からない部分もあると思うが。教師の数に限りがあるため，役割分担は子どもと一緒に活動する教員，場に行く教員と臨機応変にするのが実情である。合わせた指導は特に小低の発達，学習に必要で有効であるとするが，そのためには，実態把握や願う姿，まとまりのある

学校生活を送るためにどう単元を組んでどう展開していくか、教師の力量や連携、見取りが問われると思う。

見通しをもって学習することで意欲をもち取り組む

- ・現在は、自立活動の教育課程対象の生徒の担当である。生徒を主体にし、生徒の生活に即した生単を行うため、教師集団が、連絡を取り合いながら取り組み、生徒の成長が見られたときは、生単の有効性を実感できた。
- ・本校の作業学習は、農園芸を中心として、年間取り組むことができるよう工夫している。夏場は、畑で野菜・花づくり、冬場は、夏の農産物園芸品を利用した加工作業として取組、生徒にとっては、見通しをもって一貫した作業（播種、生育管理、収穫、加工、販売）になるよう工夫している。
- ・児童にとって何が、今、将来必要な力なのかを常に考えている。行事にながされないで柔軟に計画を立てて、生きる力を一つ一つ身につけることを念頭においていかなければと考えている。
- ・領域・教科を合わせた指導については、年計・総合については、指導内容表も作成し、行っている。おおよそ、それに沿って行っている。
- ・毎日決まった時間に取り組めると「自ら」の活動につながっていくと思う。取り組む内容は、教師側のできる状況づくりによって、「自ら」になるか成らないかと思っている。
- ・子どもが、見通しをもって自ら取り組める活動（学習内容）にすれば生活にリズムができる。そのためには、帯状の時間割が実現できるとよいと思う。
- ・一定期間、生活にテーマや見通しをもたせた学習（生単）をしてみたいと考えているが、なかなか時間割や自分の計画がうまく立てられず悩んでいる。他校の実践を知りたい。
- ・体験・経験活動を大切にし、繰り返し（発展、応用させながら）ていくこと。何より児童が興味関心をもって取り組めること。（領域・教科を合わせた指導だけにかかわらず）
- ・児童生徒の特性や興味に合わせた授業ができるので楽しい反面興味の充足だけにならないようバランスをとるよう心がけている。
- ・児童生徒の生活や興味・関心に即して単元を組むことで、実態に応じた効果的な学習を期待できる。
- ・発達障がいをもっている生徒の指導、支援に日々奮闘している。もっている力を引き出すには時間はかかったり、継続させるには、本人の意欲はより重要であると感じている。残された学校生活を充実させるために生徒と共に現実を見つめ目標をもって何事においても取り組んでいきたい。（社会に合わせる必要性）
- ・小学部段階、特に小低においては今現在をいかに生き生きと主体的な取組ができるのかという部分が主眼に置かれていると思う。
- ・生活単元学習で児童生徒の単元の目標を達成できるように教科（があれば）で、ドリル的にスキルを高めるなど、連携して取り組んでいる。
- ・「準ずる教育課程」「領域・教科を合わせた教育課程」「自立活動中心の教育課程」の3課程を統合して行う困難さが大である。領域・教科を合わせた指導を行うとき、子どもに見通しのもてる活動を組み立てにくい状況にある。

集団での学習の効果

- ・自己有用感のもてる作業内容の設定をしたい。
- ・担当してきたのは、小低学年だけだったので、小低学年は、授業への参加態度を育てたい時でもあるので、集団に少しでも落ち着いて入っていただける事を願って、問2（1）では、才を優先としましたが、いろいろとらえ方は、あると思っている。
- ・自分の役割が分かり、主体的に取り組めること、自信をもって活動できる環境づくり。
- ・小グループでの取組、ギフトを一部参考にして取り組む。
- ・その年度の子どもたちの様子をみながらグループ編成している。
- ・児童生徒の能力に即した内容、グループづくりが大切であり、達成感を味わえる授業づくりが必要。

個々もっている力や良さを生かした学習

- ・領域・教科を合わせた指導を担当する場合は、年齢相応の力をつけるよう指導していきたい。
- ・個に応じた指導を継続していきたい気持ちはあるが、行事でなかなか難しい。逆に、これらの行事に向けてそれぞれの子どもがどういった力を身につけられるかを考えながら指導している。
- ・総合的な力、生きる力との関わりが大きいので、キャリア教育の中に位置付けることが大事だと思う。
- ・個に応じた柔軟性があり、将来の生徒の実生活に役立つものが大事である。
- ・普段の生活や進路支援に生きる領域・教科を合わせた指導を考えていくことが大切だと思う。
- ・これまでに領域・教科を合わせた指導を行った経験がないが、生活に生かせる力を習得させることは、とても工夫が必要だと思うので、機をとらえて自主研修しておきたい。
- ・前任校ではずっと領域・教科を合わせた指導を行ってきた。子どもの目指す将来の姿と現在の姿をしっかりとらえないと目標設定がうまくいかないの、特に保護者とよく話し合うように心がけていた。
- ・単元等の実施に際しては、全体及び個人の目標、ねらい、具体的学習内容を明確にすることが大切であると考えている。
- ・指導内容の吟味・精選・指導法の工夫の必要性を常に感じている
- ・領域・教科を合わせた指導についてとらえ方が大きすぎてどのような活動内容、指導内容、時間割の組み立てをしたらよいか、分からない教員が多いのではないかと。子ども達にとっては、領域・教科を合わせた指導の方が、よりその子、一人一人に応じた活動ができると思う。
- ・児童生徒一人一人のねらいを明確にすること。
- ・一つの単元に対して児童生徒一人一人の目標を決め、取り組むことができ、ダイナミックに授業を展開できるものだと思う。
- ・指導内容、学習課題の焦点化・系統的な配列の在り方には、さらなる研鑽が必要。児童生徒一人一人の学習のねらいが具体性にやや欠けがちである。
- ・特別支援学校においては、対象としている児童生徒一人一人の実態が異なっており、個に対応した教育活動を行うためには、教科や領域によらない授業を行う必要があると思う。障がい等のために学びとりにくいことが多い場合は、生活や就労に直結した内容を優先的に取り組んでいく必要があるが、これは、「自立活動」や「生活単元学習」などの合わせた指導の中でなければ取り組みづらい。
- ・一人一人が力を発揮できるよう活動の設定を行うようにより事前に話し合い進めている。課題解決力を高めることができるように内容を精選している。
- ・例えば、「生活単元学習」の場合生徒の実態（能力）は、様々なことは当然あるが、どうしても話せる子、集団の学習に興味をもっている様子のはっきり分かる子等、ハイレベルな子どもが活動の中心になってしまう。
- ・学級内の生徒の実態が多様化してきている。その中で皆を生き生きと活動させるための授業の工夫が難しくなっている。
- ・障がい種及び程度に（発達段階に）よっては、領域・教科を合わせた指導は、必要。
- ・生活年齢に応じた活動で発達段階に応じた活動を展開できるので、領域・教科を合わせた指導は、実態が様々な特別支援学校には、適していると思うが、教師の力量によって最も差が生じる指導であると考えている。
- ・知的障がいのある児童生徒にとっては、必要である。（工夫しながら）

<p>目的をもって十分に活動する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・指導の中で、生活で役立っていること、成就感を感じることに、大切と思っている。 ・生徒が自分の目標をもって、活動の目的や意味を明確に理解、意識して学習できるようにしたい。 ・全員が活動に取り組みやすいことと個々に活動量を確保とのバランスがうまくとれなくて反省点として考えている。
<p>成功経験で自信をつけ、自分の力で活動する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生徒主体の授業にするためには、事前に教師の準備、役割分担がしっかりとなされていないといけないと思う。その部分が、特別支援学校ならではの指導でもあり、一番難しいと感じている。 ・知的な遅れのある人は、効果的な指導であると感じている。体験が習得に結びつくと思っている。 ・特に、知的な障がいがある児童生徒へは、体験や経験を通し学習を積み重ねていくことができることから有効な学習活動と考える。 ・自分たちで考える場面を入れていくことが大切だと思う。 ・生徒の学力・身体の状態が様々であり、個に応じた指導の工夫は、必要不可欠であるが、集団での活動、卒業後の生活に必要な技術（生活面）も高等部では重要視されなければならないと考えている。が、全体的に気もちが幼い、弱い生徒が増えてきて指導の中身の検討に入る以前に生徒が慣れるために多くの時間がかかってしまう感があることは否めない。高等部卒業後の生活をイメージすると共に実生活の中での生活経験を増やすことが大切な気がする。 ・前任校で指導していた際には、カキケコは重視していた。 ・「音楽」のような教科では、音に敏感に反応する子どももあり、また、楽器でも嫌いな音があったりする場合は、少しずつ慣らしていくように教材教具の工夫を行う事が大切だと思う。 ・子どもの実態を把握し、教科（国語、算数 etc）で基礎学力を高め、いろいろな学習の場面で自らの力で使う気もちを育てる。領域・教科を合わせた指導では、子どもの力を発揮できるように教材の準備を工夫する。 ・生徒の発達段階にもよるが生徒が「自分ができる」「わかる」と自信をもてるようになるには、ある程度類似した活動で継続することが大切だと思ってやってきた。（特に作業的なこと）はじめからやる気満々の活動はなかなかないと思っている。継続する中で自信をつけさせられるよう工夫している。 ・児童生徒が「分かった」という顔で学習に臨み、終え、ある一定期間が過ぎてからも継続して、その学習ができるようになっていくことを心がけて取り組んできた。
<p>客観性のある評価</p> <ul style="list-style-type: none"> ・評価の仕方、どうしても曖昧になりがち、客観的な評価を心がけたい、など課題は多いと感じている。 ・各校とも指導内容、教材等工夫されているが、個々の評価に統一性がなく教師の主観に頼っている。基準となる目安がほしい。（生活単元及び作業内容、種目等）かつて、文部省の手引きにあったが最近なくなった。 ・生活に即使える力、卒業後も必要とされる力が、生単や作業の中でどう身に付いているのか曖昧。学校、家庭、寄宿舎、トータルな支援の中で生徒達が、確実に成長はしている。それぞれの場での評価と身につけたい力に向けた総合的な評価が有機的につながっていく、つなげていく工夫が必要。
<p>学校、学級の実態からの課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・対象としている生徒が一人であるために、指導者は努力してやっているつもりだが、結果として生徒の姿に現れにくい。 ・本校の特徴として「領域・教科を合わせた指導」を受けている生徒たちが劣等感をもたないようにということが重要なポイントとなり、実践していく上でとても難しい。 ・教科指導を本校のような病弱支援学校の場合には、指導要領に沿って指導を進めるには困難性を日頃感じながら、教科の指導の本質から離れないように苦慮している。一般中学生の実態をもっと知る必要があると思っている。 ・特別支援は、知的な学校だけではないので、合わせた指導でも柔軟な指導支援が必要とされると考える。知的で効果があった内容が病弱では、逆効果となることもあるということを理解することが大切であろうと考える。 ・訪問学級では、年齢や個々に合わせた様々な経験を設定することが難しいと感じることがある。
<p>研修の機会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・これが大切と考えるならば、もっと実践の発信、協議がなされることが大切である。 ・領域・教科を合わせた指導は、教師の力量が大きく左右するものと思う。経験豊富な先生方から、ノウハウをどのように教えていただけたのかのように吸収していくのが大事になっていくと思う。 ・これまで領域・教科を合わせた指導について取組経験がないので意見としては十分ではないが、先日の「特別支援学校授業力向上研修講座」へ参加したことで、「生活単元」などの考え方やもち方について子どもの目線で確認させられることが多く、有意義であったことから研修による自己研鑽の大切さを感じている ・教育センターの特別支援教育担当のサイトが大変参考となっている。さらなる充実を望みます。教材・教具など常に参考にしている。プリント、動画など各学校の実践など掲載して欲しい。今年度、本校の研究の参考資料としてキャリア教育推進ガイドブックが大変参考になった。 ・特別支援学校といっても盲、聾、肢体とそれぞれの専門性があると思います。現任校、前任校とも合わせた指導は、担当しなかったで今後初めて担当するものにも参考となる資料などが充実してほしい。
<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業の準備をする時間が欲しい。 ・支援のための道具が必要となるのでその準備や打ち合わせの時間が無理なく確保できるとよい。 ・現在肢体不自由の学校で指導に当たっているが、手に障がいがあり字を書けない子にはパソコンで文字を入力して書かせている。しかし、大学受験を考えたときにパソコンでの受験を認めている大学がほとんどなく大学側の意識の改善、支援学校側での要望が必要ではないか。 ・専門性の維持についてどうされるつもりなのか？一度とぎれたものはそう簡単に元に戻りません。 ・生活経験の把握、拡大という点で家庭の協力や連携が必要なのにできない。 ・導入・展開・まとめの流れにとらわれず、生徒の主体性を尊重した取組が重視されてきているが、振り返って確認するために、ある程度のまとめは必要ではないかと思う。製品を生産する上で失敗の繰り返しは、よいことではないし、それぞれを防ぐための手立てにも限界があると思う。 ・合わせた指導は、合わせた指導の良さがあると思う。大事にしてください。 ・もっと合わせた指導を中心に、教育課程が編成されていけばいいと思う。 ・合わせた指導、合わせない指導による区別そのものが、あまり意味をなさない。例えば、「数学」の授業の中に、整容ありなどの生活指導があり、数学を通じて社会性や公共心を養うコラムの提示あり、一教科の中に教育が実在してこそ授業といえると思う。 ・特別支援に限らず、各学校でも実施するのがよいと思う。 ・何を求めるためのアンケートなのかいまいち分からない設問だったと思う。重複した同じような内容の項目でチェックしにくいアンケートでした。言葉を吟味してください。 ・このアンケート調査に見られるような教師の主観的な評価や言語のロジックのみによる研究や検証ではなくある程度の客観性をも

つた評価ができないものかと考えます。

- ・「作業学習」や「生活単元学習」など、比較的、自由な幅の中で計画できるイメージがあり、創意工夫が生かされる反面、よりどころのなさというものもあるのではないかと。現状では、「キャリア教育」が一つのキーワードとして、イメージ化している印象がある。
- ・キャリア教育の流れの中で領域・教科を合わせた指導の意味が問われているような風潮があるが、そのときの教育の流行が巡っていくことを考えれば、領域・教科を合わせた指導というものに普遍的で前向きな意味を押しさえ日々の実践を行っていければと思う。

(6) 調査のまとめ

岩手県内の特別支援学校の教諭は、領域・教科を合わせた指導の取組の中では、「児童生徒の興味・関心に応じること」、「個に応じた指導内容の設定」、「活動量の確保」、「児童生徒が向上心をもてるような手立て」、「児童生徒の良さを生かした役割分担」について、多くの教諭が取り入れていると回答している。「どちらかというとしている」という回答を含めると、ほとんどの教諭が取り入れていると自己評価している。このことより、領域・教科を合わせた指導は、岩手県内のどの特別支援学校でも児童生徒の実態に応じた効果的な指導形態として十分に機能していることが分かる。しかし、具体的な取組になると「している」という回答が減少していることから、具体的な取組について実践していくための方法を示していく必要がある。

さらに、自由記述からは、領域・教科を合わせた指導については、「指導の目的をはっきりさせて、教諭同士で共通理解しないと、授業の目的がぶれやすいと思う。(授業にならず楽しみだけがピックアップされる)」、「各校とも指導内容、教材等工夫されているが、個々の評価に統一性がなく教師の主観に頼っている」という記述から分かるように指導の目的や評価の共通理解に課題が挙げられている。また、「どんな内容を取り上げるか悩みます。これまでの学年でやってきたことを生かしてステップアップした内容も取り上げたいと思うが、内容が担任に任されていることもあり、うまく引き継げずにいる」、「児童にとって何が、今、将来必要な力なのか常に考えている」というような記述から分かるように取り上げる内容や、学習内容を積み重ねていくことについての課題が挙げられている。このように、教師間の共通理解や学習を引き継いで行くことの難しさについて課題を感じている教諭がいることが分かる。

また、「学部間の連携は、なかなか難しいと思うが、日常生活の指導等、将来の生活に深く関わる内容なので卒業後の生活をイメージしながら一貫性をもって指導していくことは、本当に大切なことだと痛感している」などの記述に見られるように、小学部から高等部までの連携についての必要性を感じている教諭がいる状況であることが分かる。

以上の調査結果より、領域・教科を合わせた指導の充実につながるためには、日常生活の充実や自立した社会生活の充実に向けた、校内の連携や教師間の共通理解を図るため、領域・教科を合わせた指導の充実のための五つの視点について、以下のように理解を深めることが大切ととらえ、資料づくりの中に生かすこととした。

ア 主体性について

岩手県の特別支援学校の教諭が最も大切にしている児童生徒の姿であり、「興味・関心をもてるような手立て」を行いながら授業を行っているという回答であった。また、自由記述の中の「毎日決まった時間に取り組めると『自ら』の活動につながっていくと思う。取り組む内容は、教師側のできる状況づくりによって、『自ら』になるか成らないかと思っている」、「児童生徒の特性や興味に合わせた授業ができるので楽しい反面興味の充足だけにならないようバランスをとるよう心がけている」という記述より、児童生徒が見通しをもって自分から取り組めるように学校生活の日課を整えることについての難しさや、興味・関心に応じることについての課題が挙げられている。そこで、興味・関心に応じた取組につながるように、指導計画作成における大切な考え方や時間割の工夫など環境を整えることについて、どのようにすればいいのか提示することが必要

である。

イ 学習ニーズについて

教諭の多くは、「個に応じた指導内容の設定」を行いながら授業を行っているという回答であった。しかし、自由記述の中の「指導する職員が生徒一人一人の身に付けたい力を把握し、授業や生活場面をとらえて、日々の生活を積み重ねていくことが成長につながると思う」という回答にみられるように、一人一人の実態に応じた指導目標の設定やその指導が積み重ねられることが大切である。そこで、児童生徒の日常生活や社会生活を充実させる取組について、自立した生活につなげるという視点や、生活年齢を加味した単元設定など、一人一人に応じた学習内容を設定し、指導や支援を考えられるように提示することが必要である。

ウ 達成感について

児童生徒の目指す姿として「児童生徒が存分に取り組む姿」を大切にしているという回答は優先順位では二番目であった。しかし、取組の様子での問では「活動量の確保」を「している」とはっきり回答したのは29.2%にとどまっており、手立てや教師の働きかけに自信がもてないでいる状況がうかがえる。また、自由記述の中の「全員が活動に取り組めるようにということと個々に活動量を確保とのバランスがうまくとれなくて反省点として考えている」という回答に見られるように、集団の中での個に応じて活動量を確保することの難しさが挙げられており、児童生徒が目的をもち十分に活動をするためには、教材・教具の工夫や教師の働きかけ、またグループ構成などの環境からの工夫について、具体的に分かるような提示が必要である。

エ 自立性について

自立性については、目指す児童生徒の姿として大切としている順位としては低く、その取組の様子での問では、「児童生徒が向上心をもてるような取組」について「している」と回答したのは21.2%にとどまっており、領域・教科を合わせた指導の充実のための必要性についての評価が低いことがうかがえる。また、自由記述の中の「生徒主体の授業にするためには、事前に教師の準備、役割分担がしっかりととられていないといけないと思う。その部分が、特別支援学校ならではの指導であり、一番難しい」という回答に見られるように、児童生徒主体の授業の必要性やそのための事前準備の大切さについて挙げられている。そこで、生活の充実や自立した社会生活につなげるためには、児童生徒が向上心をもてるような具体的な取組の方法として成功経験を増やすことで自信をつけ、できるだけ自分の力で活動しようとするような道具や用具の配置、教師の事前の準備、目標につながる評価など、具体的な取組について示していくことが必要である。

オ 共同性について

共同性については、目指す児童生徒の姿として大切としている順位は低く、その取組の様子での問では、「児童生徒の良さを生かした役割分担」について「している」と回答したのは、37.4%であった。また、自由記述の中の「児童生徒の能力に即した内容、グループづくりが大切であり、達成感を味わえる授業づくりが必要」、「一人一人が力を発揮できるよう活動の設定を行うようにより事前に話し合い進めている」という回答に見られるように、児童生徒の実態に応じたグループ編成の必要性や、集団での一人一人の良さを生かす学習の難しさが挙げられていた。そこで、児童生徒のグループ分けや役割分担、集団の一員としての意識、教師の役割分担について示していくことが必要である。

3 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料の作成

特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関する基本的考え方と調査により、領域・教科を合わせた指導の充実のためには、日常生活の充実や自立した社会生活の充実を目指し、取り組んでいくことが必要であることが明らかになった。そこで、本研究で示した、日常生活の充実や自立した社会生活の充実につながる領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について共通理解し、授業を行うことが必要である。そのため、領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料では、領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について具体的に提示することで理解につなげ、授業に取り入れるために作成するものである。

(1) 資料の概要

領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料は、授業を行う教諭が同じ目的をもち、指導目標や指導内容を設定して実践につなげていけるようにする。そこで、領域・教科を合わせた指導の充実のための視点に基づいた、目指す児童生徒の姿に迫るためのポイントについて、より具体的な内容から説明することで理解を深め、その上で共通理解を図り、授業にとりいれることができるように作成する。そこで、本資料では、領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について示した「理解編」と、それに基づいて授業の充実を目指した、計画における共通理解や授業づくりの改善につながる「授業実践編」からなる。

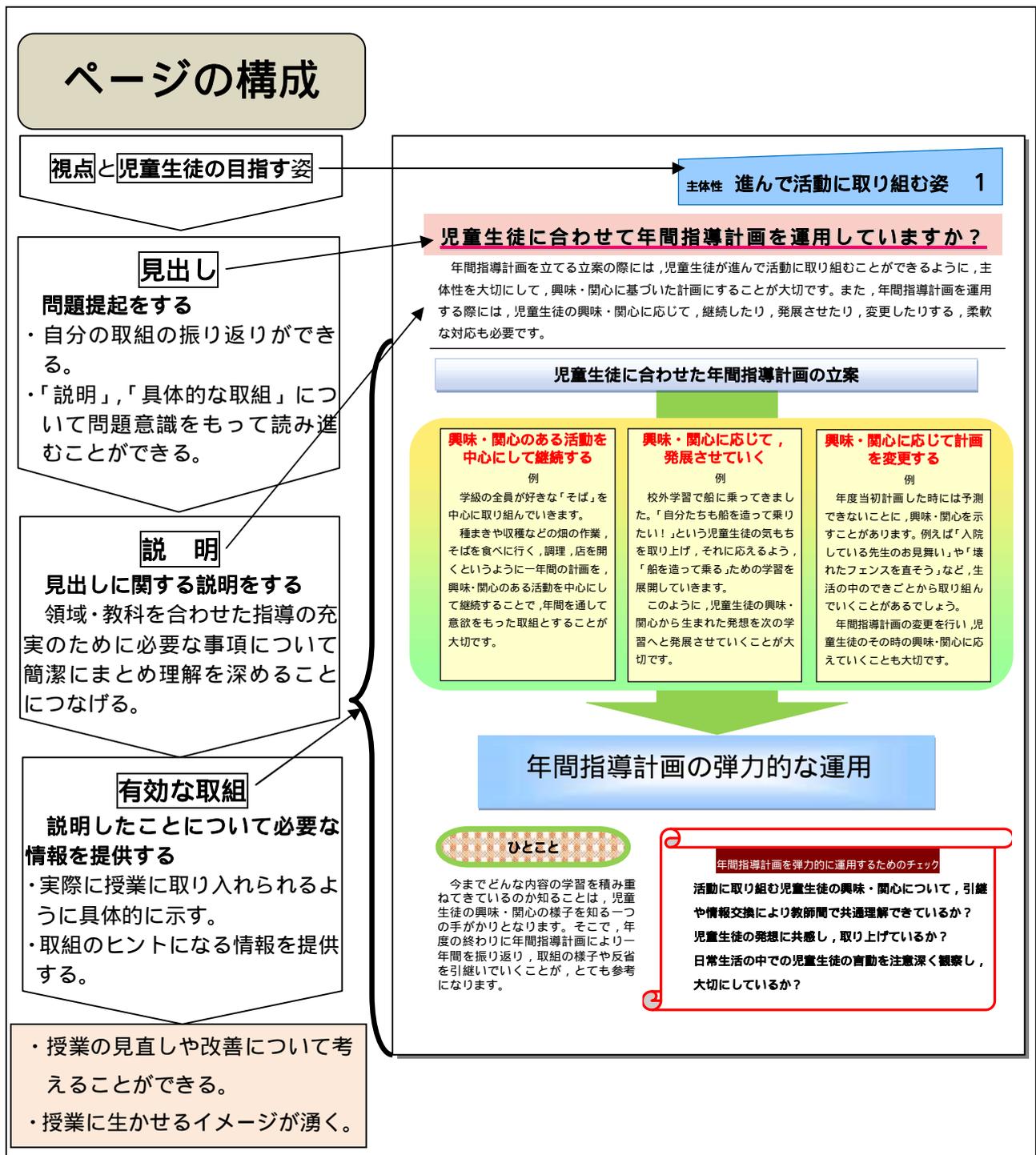
(2) 領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料「理解編」について

領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料「理解編」は、教諭が授業を行うときに共通理解して行うことができるように、本研究で示した領域・教科を合わせた指導の充実のための五つの視点である「主体性」、「学習ニーズ」、「達成感」、「自立性」、「共同性」で構成されている。その上で、それぞれの視点に基づき、授業づくりにおいてイメージしやすいように児童生徒の目指す姿と、この目指す姿に迫るためのポイントを設け、それぞれの視点ごとに項目として示すことにした。そして、授業づくりを通してそれぞれの目指す姿に迫るための具体的な説明や有効な取組の例について、各項目毎に1ページずつ示している。「理解編」の内容は、次ページ【表3】に示す通りである。

【表3】児童生徒の目指す姿に迫るためのポイント

視点	視点に基づいた目指す児童生徒の姿 「資料の中で用いる目指す児童生徒の姿」	目指す姿に迫るためのポイント	資料の内容
主体性	生活に必要な経験を、見通しや目的をもって具体的に学ぶことにより、自らが積極的に学習に意欲をもって取り組むことができる。 「進んで活動に取り組む姿」	児童生徒が自ら見通しをもって行動できるように日課や学習の環境を分かりやすくした実践につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ・年間指導計画の弾力的な運用 ・見通しがもてる時間割 ・一人一人の必要な生活 ・意欲が育つような活動 ・興味関心による目的や内容の明確化
学習二一ス	自分の日常生活や社会生活に合わせた活動を通して、生活が充実するような技能や習慣を身に付けることができる。 「能力に即した活動に取り組む姿」	児童生徒の知的障がいの状態や経験に応じて、児童生徒の今もっている力や良さ、自立につなげるために何が必要であるかなどを把握しながら実践につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ・自立した生活を見据えた実態把握 ・日常生活や社会生活の充実のための知識や技能 ・生活年齢に応じた個別の目標 ・一人一人の活動の充実のための支援
達成感	活動に対する目的をもち、十分に力一杯活動に取り組むことで、大きな満足感、成就感をもつことができる。 「存分に活動に取り組む姿」	児童生徒のもっている力に合わせ、活動の目的がもて活動中も手順を迷わず、順番を待たずに十分な活動ができるような実践につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ・目的がもてる計画 ・個に応じた十分な活動 ・十分に活動できる環境の工夫
自立性	自分の取組が評価される経験を通して自信が付き、さらにできるだけ自分の力で活動しようと意欲が生まれ、向上心をもつことができる。 「自分のもてる力を高めようと取り組む姿」	教師の必要以上の支援や、支援なしでは活用できない教材について見直し、児童生徒の成功経験を増やす視点を大切にされた実践につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ・社会生活につながる目標 ・児童生徒主体の授業 ・生活年齢にあった活動 ・自信を付ける成功経験 ・自分で分かり活動できる道具や用具の配置 ・自分で使える教材・教具、補助具 ・より自立した生活を目指す取組 ・自分の成果が分かる評価
共同性	集団の中でも皆と共に力一杯取り組むことで、集団の一員としての意識を培うことができる。 「仲間や教師とともに取り組む姿」	集団での活動を通して、役割を適切に得られるようにしながら、児童生徒一人一人が主役であるような活動やグループ構成を工夫した実践につなげる。	<ul style="list-style-type: none"> ・集団の一員としての意識 ・年齢相応の意識 ・教師の役割 ・児童生徒の役割分担 ・良さを生かせるグループ分け

各ページの構成として各ページとも次ページ【図 11】で示すような様式で統一し、「児童生徒の目指す姿」から導き出されたそれぞれの「見出し」を疑問文で問いかけるように示し、それに応じるように具体的な文章として「説明」し、「有効な取組」という順番で読んでいくように配列した。このようにすることで、領域・教科を合わせた指導の充実のための視点を基にした児童生徒の目指す姿についてイメージし、自分の領域・教科を合わせた指導の取組を思い起こしながら、今までの授業を改善することができる考えた。また、授業を改善するヒントを必要に応じて示すことで、授業に取り入れることをねらった。



【図 11】領域・教科を合わせた指導の資料「理解編」の各ページの構成

(3) 領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料「授業実践編」について

領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料「授業実践編」は、「理解編」に基づいた五つの視点の共通理解や授業づくりの改善につなげていくための資料である。そこで、そのための手順を示した「授業づくりシート」を作成した。

この「授業づくりシート」においては、記入の段階において授業の打ち合わせをすることで、児童生徒の活動の様子を具体的に想定しながら授業の計画について担当者間で話し合いをし、その中で共通理解、授業の改善を図ることを目的としている。このことを通し、実際に授業を担当する教師間での話し合いにより、領域・教科を合わせた指導の充実につながるものと考えた。

この資料の構成は、【表4】に示す通り【表4】領域・教科を合わせた指導の資料「授業実践編」の項目と内容である。

【表4】領域・教科を合わせた指導の資料「授業実践編」の項目と内容

項目	内容
実践編の活用の仕方	授業の計画，打ち合わせ，授業改善，研修資料
領域・教科を合わせた指導の授業づくりの手順	単元名を決める 授業の目標を設定する 日程の計画を立てる 活動内容を決める 配置図を書く 道具や教材を配置する 個別に必要な環境支援をする 個別に必要な教材・教具，自助具を提供する 教師の役割分担をする
授業づくりシートの記入例	書き方
授業づくりシート	記入例

授業づくりの手順を示すそれぞれのページには、【図12】のように「手順の内容と説明」、「具体例」、「関連事項」、「授業づくりシートへの記入欄の提示」が示されている。「手順の内容と説明」を簡潔に説明し、「具体例」を示すことで、五つの視点について授業に取り入れるイメージが湧き、取り入れることができるように考えた。「関連事項」には、計画を立てるときにヒントになる内容や「理解編」で示されているページを提示することで、「理解編」を参考にできるようにした。

そして、「授業実践編」には、この手順に従って授業の計画を作成していくことができる「授業づくりシート」を資料として添付した。次ページ【図13】、【図14】は、その記入例である。

このシートに必要事項を記入して進めていくことで教職員が五つの視点を意識しながら授業づくりができるように考えた。また、表や図により授業の計画を視覚的に見ることによって改善点が見やすいように配慮した。このような構成で作成することで授業の実際の流れや児童生徒の活動の様子を予測しながら、児童生徒の目指す姿に迫るような計画を立てることができると考えた。

手順の内容と説明
手順の意図や留意事項について示す。

具体例
・関連した具体的な事例をいくつか示す。

関連事項
・授業が改善するように関連した取組について示す。
・「理解編」で具体的に書かれているページを示す。

授業づくりシートへの記入欄の提示

3 日程の計画を立てる
日程の計画は、見通しをもって学習を進めていけるよう計画を立てることが大切です。
特別支援学校の児童生徒は、初めてのことが苦手だったり、できるようになるのに時間がかかりたりします。
しかし、毎日、繰り返して行うことで活動の流れや手順を覚えることができると、落ち着いて活動できます。また、活動に慣れ、定着させることができます。このようにすることで、自信をもって積極的に活動に参加できるようになります。
そこで、日程の計画を立てる場合は、活動が定着するために必要な期間を設定しなければなりません。また、活動に慣れ、発展させるための期間も必要です。
以上のことを考慮して日程の計画を立てることによって、次のようなことをねらいます。

- 活動の流れが分かり、見通しをもって取り組む
- 繰り返しの学習により、知識や技能を定着・向上させる
- 工夫をしたり、友だちと関わったりする等して、自分で積極的に活動する

関連して
日程の計画は、児童生徒にも分かることで学校での学習を楽しみにすることができるようになります。そこで、カレンダーに書き込むなどして授業の予定として表示することが必要です。
そこで、どんな学習が分かることで学校に行くことを楽しみにできるように、日程の計画を設定することが望まれます。このことは、「理解編」の p4、p14、p23 を参考にしてください。

具体例
活動の流れが分かる
例えば、木工班の作業でヤスリがけの担当になりました。工程表を作り作業の流れを示し、その流れに従って継続して取り組んでいるうちに、自分の担当のヤスリがけの次の工程が分かり、自分で次の工程に持って行き、依頼や報告をするようになりました。

繰り返しの学習ができる
例えば、ボウリングの単元でペットボトルでピンを作りました。作り方に慣れてくるとシールのはり方やマジックで模様を描くことが上手になりました。

自分で積極的に活動する
例えば、段ボールのそりで斜面を滑り降りる遊びの時間。毎日繰り返し遊んでいるうちに、友達と一緒に乗ったり、つなげたり、大きさを変えたりしながら、自分たちで工夫して遊びを発展させていくことができました。

このページの手順は、「授業づくりシート」の赤い枠で囲まれた欄に記入します。

【図12】「授業実践編」の授業づくりの手順の各ページの構成

1 単元名

サファリパークへ行こう

2 授業の目標

- 動物に親しみ、動物を見たり、えさをあげることができる。
- マナーを守って公共の施設を利用することができる。

3 日程計画

日	月	活動内容	No
7	月	校外学習について知る	1
8	火	動物について知る・約束の確認	2
9	水		
10	木		
11	金		
12	土		
13	日		
14	月		
15	火		
16	水		
17	木		
18	金	サファリパークへ	3
19	土		
20	日		
21	月		
22	月	事後指導	1

4 活動の流れ

No1				No2			
活動内容	時間	配置図	紙板書	活動内容	時間	配置図	紙板書
1	おはなし	10	1	1	おはなし	10	1
2	ビデオ	20		2	しおりづくり(約束)	10	2
3	約束	10	1	3	えさやり	20	3
4				4			
5				5			
6				6			

No3				No4			
活動内容	時間	配置図	しおり	活動内容	時間	配置図	準備等
1	出発式			1			
2	スクールバス		ランチセット リュックなど	2			
3	サファリパーク			3			
4	スクールバス			4			
5	解散			5			
6				6			

【図 13】「授業実践編」シート1の記入例

5 配置図

7 個別に配慮を要する児童生徒

- Bは、活動が単調になるとバニック状態になるのでプリントや写真をその都度T1に取りに行くようにする
- Cは、隣の児童を気にするのでT2が間に入って見えないようにする

9 教師の役割分担

T1: 進行、全体への指示
T2は、A、B、Cを指名された時、前に入るよう肩をたたく、席に戻るときに呼んで席を提示する。
T3は、Hが指名された時、前に入るよう肩をたたく、席に戻るときに呼んで席を提示する。
T2: Cのバニック時に対応
Dの移動時の補助

6 道具の配置について

朝の会と同じ体型いすを持って集合する。一列目の机を下げ、前のスペースを空ける。児童が自分で自分の机を移動する。

8 個別に必要な教材・教具・自助具

- しおりづくり
- D、Gは、手本を見て書き込み
- Fは、作成手順表。書く見本は、1ページごとにT1からもらう。
- A、B、E、Hは、写真を貼り付ける活動。
- プリントHは文字と写真が印刷されたものを使用。
- マッチングさせて張る。
- Cは、プリント

【図 14】「授業実践編」シート2の記入例

4 指導実践及び実践結果の分析と考察

(1) 指導実践の目的

ア 領域・教科を合わせた指導を充実のための資料の有効性

領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「授業実践編」が、本研究で示した五つの視点を授業に生かす取組につながることに資するものであったか把握する。

イ 資料の修正・改善

領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」及び「授業実践編」を提示し、それを活用した授業を行った際の成果と課題から、資料についての修正・改善を図る。

(2) 指導実践の概要

指導実践の内容は、授業を行う教職員に領域・教科を合わせた指導の資料「理解編」、「授業実践編」に目を通してもらった上で、数日後、「授業実践編」を活用しながら授業の計画を立て、授業づくりの打ち合わせを行ったうえで、授業実施をする。そして、授業実施の後に、授業づくりに関わった教職員にアンケート調査を行う。

授業は、前沢明峰支援学校小学部6年生の児童13名、担当者7名を対象とした生活単元学習「クリスマス会をしよう」の単元で行った。

指導実践の概要を【表5】に示す。

【表5】指導実践の概要

日時	指導実践の内容	分析と考察に関わって
12月2日(木)	・実践の概要説明 ・領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」、「授業実践編」配付	
12月6日(月)	指導実践1 単元の打ち合わせ1	打ち合わせの様子の観察・聞き取りの実施
12月8日(水)	指導実践2 単元の打ち合わせ2	打ち合わせの様子の観察・聞き取りの実施
12月13日(月)	指導実践3 「クリスマス会をしよう」単元実施	
12月14日(火)	指導実践4	
12月15日(水)	指導実践5	
12月16日(木)	指導実践6	
12月17日(金)	指導実践7	
12月20日(月)	指導実践8	
12月21日(火)	指導実践9	事後アンケート実施

(3) 指導実践の分析と考察

指導実践は、打ち合わせの様子を観察した記録と、打ち合わせ後の聞き取り、事後アンケートにより分析と考察を行った。

ア 授業の打ち合わせの様子

授業の打ち合わせは、生活単元学習「クリスマス会をしよう」の計画時に2回行ったものである。事前に配付した領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「授業実践編」に示されている授業の計画の手順に従い、授業づくりシートに必要な事柄を記入しながら主担当者に事前に計画を立ててもらった。

授業の打ち合わせにおいては、この主担当者が記入した授業づくりシートを資料として、担当者全員で行い、1回目は、授業の全体計画について行われた。2回目は、授業の具体的な支援、

教材・教具について行われた。授業の打ち合わせの様子について、【資料5】に示す。

【資料5】授業の打ち合わせ は、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（理解編）に関わる内容

指導実践 1	指導実践 2
日時：12月6日(月)14:40～15:30	日時：12月8日(水)14:40～15:30
目的：授業の全体計画	目的：授業の具体的な支援，教材・教具等について
<p>(話し合いの様子：抜粋)</p> <p>意欲が育つような活動</p> <p>自分で好きな活動を選択することについて主担当の教諭から提案された。児童自身が、どちらにするか考えて、自分でやりたい活動を決定するなど、主体的に活動に参加することでさらに活動を楽しめるようにしたいという考え方からであった。</p> <p>興味・関心による目的や内容の明確化</p> <p>新しいことに取り組むことが苦手な児童がいるので、自分の意志で決めると経験せずに終わるのではないかと心配する教諭がいた。そこで、話し合いを通して、主体性を大切にしていこうとをねらいとして、児童生徒が興味・関心をもてるように教師の事前の準備や提示の方法を工夫し、対応することになった。また、どちらの活動をやってみたいか考えるためには、どちらも魅力的な活動として提示する必要がある。そのため、全員が二つの活動のどちらにも魅力を感じるような経験しておくことが必要であるということで単元までに昼休みなどを利用して、遊ぶ計画を立てることにした。</p> <p>日常生活や社会生活の充実のための知識や技能，</p> <p style="text-align: center;">一人一人の活動の充実</p> <p>当日の流れに見通しをもって活動できることが大切であるということが確認され、次第づくりや司会の役割を担当することを手立てとするなど、自分に必要な力を必要な場面で学ぶことができるような役割分担を行うことになった。</p>	<p>(話し合いの様子：抜粋)</p> <p>自分で使える教材・教具，補助具</p> <p>会で用いる次第（進行表）は、進行の様子がみんなに分かるように終わったらはがしていくタイプにすることになった。</p> <p>意欲が育つような活動</p> <p>児童生徒が、意欲をもって活動を楽しめるようなゲームのルールについて話し合われ、黒ひげゲームは、黒ひげをとばした人がレイをもらえることに決定した。</p> <p>自分で使える教材・教具，補助具，意欲が育つような活動</p> <p>児童が自分の意志で選択できるように選択することの意味が分かるような方法（選ぶ手段としては何がいいかなど）について検討され、カードは使わず、実物のマイクと剣に決定した。</p> <p>自分で使える教材・教具，補助具</p> <p>グループに分かれての活動を行う場合、どちらの活動を選択しても見通しがもてるように、順番の提示を同じ方法で行うことになった。</p> <p>一人一人の活動の充実，役割分担</p> <p>児童生徒の活動や役割についての話し合いでは、招待状・次第づくりなどは字が書ける児童が担当し、いつも同じ児童になる傾向にある。しかし、教師が支援等の工夫をすることで実態に応じた活動をしながら、様々な活動に挑戦することが可能であると話し合った。</p> <p>個に応じた十分な活動</p> <p>実際にレクを行うための活動時間が十分か話し合った。</p>

【資料5】より、単元の打ち合わせの様子について、以下のように考察した。

- ・話し合う視点が、「進んで活動するためにはどうするか」、「自分でできるようにするためにはどうするか」、「十分に活動するためにはどうするか」、「一人一人の活動を充実するためにはどうするか」などについて中心に話し合う様子が見られ、話し合いの焦点が絞られており、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」及び「授業実践編」により、提示した領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について意識していることがうかがえた。
- ・授業に関わる教職員全員が、授業で児童の目指す姿について、同じ視点を意識して話し合うことで、出された提案をよりいいものへと発展していくような話し合いになっていた。
- ・具体的な取組について細やかに吟味していったため、話し合いの時間が想定以上にかかった。授業づくりシートの内容の見直しや、話し合いの中心になる部分の提示が必要である。

イ 打ち合わせ後の担当教諭からの聞き取り

指導実践1及び2の授業の打ち合わせ後の聞き取りについて、次ページ【資料6】にまとめた。

「理解編」について	「授業実践編」について
<p>理解編を読むことで分かっていることでもあらためて気付かせられた。 教師が手をかすすぎることについて反省し、意識したいと感じた。 内容的に分かっているにもかかわらず実践に生かせない事項について再認識できた。 文字が多く読みにくい 目指す子ども像と見出しの関係がわかりにくい 内容が重複していることがあった。</p>	<p>具体例が示してあり、参考になる。授業に取り入れるイメージが湧く。 配置図を見ながらの話し合いは、実際の場面が想定でき、具体的な児童の様子を考えながら話し合えるのでよい。 具体例は、たくさんあった方がよい。</p>
「授業づくりシート」について	その他
<p>配置図があることで授業のイメージが湧く 活動の流れについて、改善できる。 場面ごとに配置図を書くプリントが多く見にくい。 書き込む欄が多すぎる。 内容が指導案より細かすぎる。 道具や教材教具について、個別に必要な環境支援、教師の役割分担など、どんな内容を記入したらいいかわかりにくい。</p>	<p>資料を読んだので、目指す姿を意識するようになった。 みんなで確認できるので、支援について様々な意見が出され、良いものになっていく。 様々な点で共通理解が図れる。 「主体的に」など教師が、同じ視点での意見を出し合うことで、支援が充実できる。 話し合いに時間がかかりすぎる。</p>

【資料6】により、単元の打ち合わせ後の聞き取りから以下のように考察した。

- ・領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」に示した領域・教科を合わせた指導の充実のための視点に基づいた具体的な取組について示したことは、自分の取組について反省したり、意識することにつながっていた。
- ・領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「授業実践編」に具体例を示したことは、領域・教科を合わせた指導の充実のための視点を授業に取り入れられたり改善したりすることについてイメージをもつことにつながっていた。
- ・授業づくりシートにより授業の計画を立て、これを基に打ち合わせをすることで担当者で意見を出し合い、最善の方法を探っていく様子が見られた。表や図を多く取り入れて作成したことで、打ち合わせの内容が、より具体的なものになり、有効であった。
- ・短時間で有効な打ち合わせにするためには、話し合いの焦点を絞ることができるように授業づくりシートの改善、活用の仕方について見直しが必要である。
- ・領域・教科を合わせた指導に充実のための資料を有効に利用するためには、改善・修正が必要である。資料の修正・改善の方向性を以下のようにまとめた。

<p>領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（理解編）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見だしをページの内容が分かる文章に直し、自分の授業の振り返りに使用できるようにする。 ・図や具体例を入れて、内容が分かりやすいように示す。 <p>領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（授業実践編）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業づくりシートは、記入しやすく、視覚的に見て分かりやすいように図や表を中心にする。話し合いの時、全員が同じイメージがもてるような改善が必要である。 ・数字や記号の使用について、混乱しないように使い分ける。

ウ 事後アンケート

【資料7】により「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料」に関する調査を、事後アンケートとして授業を行った担当者6名が回答した。

【資料7】事後アンケート用紙

「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料」に関する調査

この調査は、領域・教科を合わせた指導において、課題改善を図り、児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮する授業づくりを目指して作成した「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（理解編）」と「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（授業実践編）」についてご意見を伺うことです。

以下の質問にA～Dから選び、お答えください。

A：とてもそう思う B：そう思う C：あまり思わない D：全くそう思わない

問1 「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（理解編）」は、授業の見直し改善を図ることにつながりましたか？ A B C D

その理由や有効だった点・改善を要する点についてお書きください。

問2 「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（理解編）」は、児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮できる授業にするためにどんな取組をしたらいい分るものでしたか？ A B C D

その理由や有効だった点・改善を要する点についてお書きください。

問3 「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（授業実践編）」は、児童生徒活動の様子を具体的に把握しながら担当者間で話し合いをし、その中で計画において共通理解をしたり、取組の内容や支援など授業の改善をしたりすることにつながりましたか？ A B C D

その理由や有効だった点・改善を要する点についてお書きください。

問4 「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（理解編）」と「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（授業実践編）」により、生活単元学習「クリスマス会をしよう」の授業が、これまでの授業に比べ充実することにつながりましたか？ A B C D

その理由や有効だった点・改善を要する点についてお書きください。

問5 「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（理解編）」と「領域・教科を合わせた指導の充実のための資料（授業実践編）」について、感想等ご自由にお書き下さい。

ご協力ありがとうございました

(F) 領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」について

授業の見直しや改善

問1の領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」が、授業の見直しや改善につながったかについては、全員が「とてもそう思う」、「そう思う」という回答であった。【資料8】は、その回答についての理由や有効だった点・改善を要する点についての記述である。

この結果より、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」は、既に分かっている観点が含まれていたり、観点が多すぎるといった意見があったりした。しかし、資料としては概ね分かりやすく、具体的な事例によりイメージでき、観点をチェックしながら読み進むことで授業の改善につながったと言える。

【資料8】問1についての記述

：有効だった点 **：改善を要する点** N = 6人

観点が多すぎる。

チェック表のように細かく一つ一つ確認できる

目次でチェックし、詳しく見たい部分を開くことができる。

年間を通した取組の大切さが分かった。

内容的には、すでに分かっている実践に生かしていない多くの事項について再確認することができた。

具体的な事例がありイメージが作りやすかった。

平易な言葉で分かりやすかった。

児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮できる取組

問2の領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」が、児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮できる取組につながったかという問いに、全員が「とてもそう思う」、「そう思う」という回答であった。

【資料9】は、その回答についての理由や有効だった点・改善を要する点についての記述である。

この結果により、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」は、内容の重複や詳しい事例を増やすなどの見直しの必要があるものの、領域・教科を合わせた指導を充実させるための視点についてのポイントが提示されたことで、児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮できる授業にするための取組の参考になったと言える。

(1) 領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「授業実践編」について

問3の担当者間の共通理解と授業内容の見直しや改善が授業の共通理解と見直しや改善になったかという問いの回答は、全員が「とてもそう思う」、「そう思う」という回答であった。【資料10】は、その回答についての理由や有効だった点・改善を要する点についての記述である。

この結果により、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「授業実践編」により、具体例や手順が分かりやすく示されていることでイメージをもちながら共通理解することにつながったと言える。

(ウ) 授業の充実について

問4の領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」及び「授業実践編」により、生活単元学習「クリスマス会をしよう」の授業がこれまでの授業に比べて充実したかという問いの回答は、「とてもそう思う」、「そう思う」4名、「あまり思わない」2名であった。【資料11】は、その回答についての理由や有効だった点・改善を要する点についての記述である。

【資料9】問2についての記述

：有効だった点	：改善を要する点	N = 6人
内容の重複があったので精選の必要がある。		
具体的な活動の視点が読みやすかった		
常にいくつかチェックして参考にして気もちの改善を行って授業をしている。		
実際にどのような取組が行われているのかももう少し詳しい事例が、いくつかあるとイメージが湧きやすくなると思う。		
項目ごとの取り組む姿に細かくポイントが示されていたので、参考になった。		

【資料10】問3についての記述

：有効だった点	：改善を要する点	N = 6人
進んで取り組む姿が参考になった。		
各ページの右側の欄にある事例具他例は、「1～9までの授業づくりの手順」を考える上で大いに参考になった。このような例は、あればあるほどよい。		
具体例があったのでイメージをもちやすかった。		
担当間で共通理解できた。単元ごとに行ってはいるが、曖昧になっていたことを確認できた。		
共通理解するときの根拠がありよい。		

【資料11】問4についての記述

と回答した教諭 「あまりそう思わない」	：有効だった点	：改善を要する点	N = 2人
	今までの授業もみんなと同様に打ち合わせをしてやっていたので以前とあまり変わらない。 図があることで、共通理解できた。		
回答した教諭 「とてもそう思う」、「そう思う」と	：有効だった点	：改善を要する点	N = 4人
	授業づくりシートで細部まで確認できたので、授業の進行がスムーズになった。 配置図に合わせて提示されていたので口頭での説明の場合より、イメージがつかみやすいと思った。 グループごとの打ち合わせも行い全体の流れが分かった。		

「あまりそう思わない」と回答した教諭の記述を見てみると、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料を使用しても「以前と変わらなかった」というものであった。しかし、図があることでの有効性が挙げられており、これは、「とてもそう思う」、「そう思う」と回答した教諭の記述の中でも共通に記されていることである。共通理解をするためには、視覚的に分かりやすく、図の中に提示するものを具体的に提示したことで話し合いの焦点が絞られたため、共通理解につながったと言える。このことから、より授業の充実につなげるために、授業実践編の中の授業づくりシートを **【資料12】自由記述** 図などの活用で分かりやすく示していくことが課題として明らかになった。

(I) 自由記述

【資料12】は、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」、及び「授業実践編」についてアンケートの回答における自由記述である。

この記述により、「クリスマス会をしよう」の単元は、児童生徒一人一人が主体的に活動できるように担当する教員が共通理解の下、協力して授業づくりを行った結果、教師の役割が明確になったり、授業の流れが確認できたりしたことで、児童生徒の自発的に活動する姿につながったと言える。

：有効だった点	：改善を要する点	N = 6人
	授業実践編は、授業を構築する上で使いやすかった。	
	授業計画シートは、数字が多く混乱することがあった。	
	普段から新しい単元前に打ち合わせを行っているが、担当任せ、活動グループ任せだった。今回は、打ち合わせをしたことで流れがよく分かった。	
	職員も一人一役ということで準備ができた。クリスマス会当日は、職員も楽しむことができた。	
	共通理解して授業をすると子ども達が、より自発的に動く姿が見られる。「よしやるぞ!」という気になる。	

5 特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に関するまとめ

(1) 成果

ア 領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」について

領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」は、以下のように、領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について理解し、共に授業を行う教職員が、共通理解し授業を行うことにつながった。

- ・領域・教科を合わせた指導の充実のための視点に基づいた具体的な取組について分かり、自分の取組について反省したり、意識することにつながった。
- ・領域・教科を合わせた指導の充実のための視点を共通理解することで、児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮できる取組につながった。

イ 領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「授業実践編」について

領域・教科を合わせた指導の充実に関する資料「授業実践編」は、以下のように領域・教科を合わせた指導の充実のための五つの視点を、授業に生かすことで授業づくりの改善につながった。

- ・具体例が示されていることで授業に領域・教科を合わせた指導の充実のための視点を取り入れた計画ができた。
- ・授業づくりシートにより担当者全員で計画について打ち合わせをすることで、具体的に支援や環境について話し合い、事前の準備をすることができた。

(2) 課題

本研究は、生活単元学習で指導実践を行った。他の作業学習などの領域・教科を合わせた指導においての実践を図ることが必要である。

研究のまとめ

本研究は、領域・教科を合わせた指導において、課題改善を図り、児童生徒一人一人が主体的に自分の力を発揮する授業づくりができるような資料の作成により、特別支援学校における領域・教科を合わせた指導の充実に役立てるものであった。以下、研究の成果と今後の課題について述べる。

1 研究の成果

- (1) 領域・教科を合わせた指導の充実のために岩手県立特別支援学校の教諭への調査を行い、課題について整理し、資料づくりの方向性を明らかにしたこと。
- (2) 領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について示し、授業に生かすことができるよう資料を作成したこと。
- (3) 領域・教科を合わせた指導の充実のための視点について示した領域・教科を合わせた指導の充実のための資料「理解編」及び「授業実践編」により、共通理解を図りながら授業づくりを行うことで、授業の修正・改善に役立つことを確認したこと。

2 今後の課題

領域・教科を合わせた指導が、児童生徒一人一人の卒業後の生活の充実につながるような学校としての一貫した指導となるように、領域・教科を合わせた指導の充実のための資料が、学部間の連携や引継の資料としても活用されるよう改善と修正を図り、実践を重ねていくことが必要である。

おわりに

長期研修の機会を与えてくださいました関係諸機関の各位並びに所属校の先生方と児童生徒のみなさん、調査にご協力していただいた岩手県内の特別支援学校の先生方に心から感謝を申し上げ、結びのことばといたします。

【引用文献】

- 小出進監修 千葉大学教育学部附属養護学校(2002),『生活中心教育の原理』, p26
文部科学省(2009),『特別支援学校 学習指導要領解説 総則等編(幼稚部・小学部・中学部)』, p242 , p244 , p245 , p246 , p247 , p248
文部科学省(2009),『特別支援学校 幼稚部教育要領 小学部・中学部学習指導要領 高等部学習指導要領』, p44

【参考文献】

- 太田俊巳監修 千葉大学教育学部附属養護学校(2005),『授業が変わる 単元が変わる』, ケー アンド エイチ
太田正巳(2000),『障がい児のための授業づくりの技法』, 黎明書房
小出進監修 千葉大学教育学部附属養護学校編著(2002), 実践生活中心教育『今を主体的に生きるための総合化』
国立特殊教育総合研究所(2006),『生活単元学習を实践する教師のためのガイドブック』
全日本特別支援教育研究連盟 名古屋恒彦責任編集(2010),『基礎から学ぶ知的障がい教育』,
富山大学人間発達科学部附属特別支援学校(2007),『平成 19 年度教育実践研究会講演記録』
前沢明峰支援学校 (2009),『岩手県立前沢明峰支援学校研究紀要』
宮崎直男(1997),『特殊学級の生活単元実践モデル』, 明治図書